

特232

389

原 鴻 太 郎 著

醫 海 の 燈 臺 全

一 名 古 今 醫 優 劣 論

始



特232
389

岸原鴻太郎著



の

燈臺

全

一名古今醫優劣論



醫海の燈臺 (一名古今醫優劣論)

目次

緒言	一
凡例	二
第一章 醫師	三
第二章 醫道	五
第一節 古醫道	五
第二節 日本の古醫道	二
第三節 日本の現代醫道	七
第三章 古醫學術	七

第四章 現代西洋醫學批判

- 第一節 天然自治…………… 四
- 第二節 現代醫の無力…………… 四
- 第三節 化學藥の無効…………… 四
- 第四節 手術即刀療の不結果及慘忍…………… 五
- 第五節 微菌病原論を駁す…………… 五
- 第六節 解剖生理學の杜撰…………… 七
- 第七節 現行改正孔穴の缺陷…………… 七

第五章 醫風の墮落

七五

醫海の燈臺 (一名古今醫優劣論)

緒言

本書に謂ふ所の醫は意にして宇宙に充滿する至理を指す。例へば釋迦を醫王と稱するが如し、疾病の醫は勿論包含す。一般の學者政治家等も皆其中に有り、何んとなれば宇内の至理は唯だ一の陰陽太極なれば也。故に本書の論は醫療、政治、學道に及ぶ讀者焉を諒せよ。

今専ら治病上より見來れば古の醫海は廣大深遠なれども、其航路は平安無事也。今の醫海は狹窄淺近、暗礁密布して危險此の上無し。孔子曰異端の學は害のみと、其寸益なきを謂ふ。孟子曰楊墨の道息まざれば、孔子の正道著れず。邪説、民を欺きて、仁義の道塞り人相食む」と我は云ふ。西洋意識一偏の片輪學(人智に三種あり意識、潜在意識即ち悟道智、靈智即ち全智全能是れ也)意識の産物たる顯微鏡論「コッホ」か微菌病原説乃至死體解剖より來る組織及生理學等を破らざれば、天地の大道明ならず、眞正の醫道興らず、寡慾、慈悲の徳亡びて、千弊萬害簇生し、人畜の横死極り莫し」と是れ本篇の大旨也。今や廣田内閣は、皇道を明にし庶政の革新を高唱せらる。故に不肖を顧みず宿昔抱懐する所を述べて、以て國恩に報ぜんと欲す。反對論者は遠慮無く辨難來れ我生存中は斯道の爲め奮闘せんと期す。謹白

昭和十一年丙子七月吉日

神奈川縣腰越町大字津村

岸原鴻太郎

八十二歳

二

心身兼治む醫王の道。
諸病元來心より生ず。
粗工識らず神聖の學。
羊頭狗肉殺傷多し。

凡例

- 一、本書の古典及び諸説は多くは意譯也人の了解し易き爲め也。
- 一、本書掲ぐる所の經文及び諸説は學道の一斑を示すのみ一を以て十を察す可し。

第一章 醫師

大醫張介賓曰醫なる者は理也又曰意也」と思ふに此の二者は其指す所異なれども、其歸着する所は一也。即ち理とは宇宙唯だ一の至理なる陰陽太極を謂ふ。是れ天地萬物の祖也。又意とは人の清淨心を指す。清淨心は即ち無念無想の間に忽然發する所の心也。昔し楠正成の奈良に遊ぶや、一僧に會して佛法を問ふ、僧乃ち正成と呼ぶ。正成應諾す（はいと答ふ）此のはいとの對は、無念無想の間に發し、少しも分別思量に涉らざる。清淨無垢の心にして、即ち天地陰陽其儘の機也。之を神と稱し佛と稱す。（佛書に曰目前に法無し意目前に在り」と是れ直覺是れ己身の佛也。法は方便のみ手段のみ）此の問答は、獨り楠子のみにあらず、古人は常に之を用て、己身の佛を悟らしむ「黃檗の運禪師は有名なる古佛なり。唐の宰相裴休、法を問ふ、黃檗聲を大にして裴休と呼ぶ、休應諾す（はいと答ふ）黃檗曰佛何の處に在るやと、裴休即時に旨を領得せり。此の佛心は今日吾人の所謂意識にあらず、又潜在意識（悟道）にもあらずして、意識と潜在意識兩者の中和なる靈智也。是れ即ち陰陽の合和なる太極にして變轉無極なる聖心也。素問天元紀大論に曰物の生ずる之を化と謂ふ。物の極る之を變と謂ふ。陰陽測られざる之を神と謂ふ。神に方無し（一定の方位無きを云ふ）之を聖と謂ふ」と此の神變無極のことは、易の醫辭傳第八章にも見ゆ「現代の西洋學者は多く此の理を知らず、就中醫學者は意識即ち眼耳鼻舌身意なる六賊に捕はれて、潜在意なる悟道心も、靈智なる佛心も、知らざるが故に一理一物を固執して變通の道を

三

知らず、顯微鏡を過信し微菌説に誤まり、分析に捕はれて、一の有効なる藥劑だも製出し得ず、一の病理だも知らざるが故に、治効を擧げ得ざるに似たり。又法學者も亦多く意識一偏にして神に方無し、之を聖と謂ふてふ理に通ぜざるが故に、法律の文字に捕はれて、更に變通の妙無きが如し、即ち刑法には酌量減輕の規定あり、又非常上告特赦大赦等の寛和の法あれども、可憐なる國事犯等に其適用を見ざるは法文を墨守して運用の妙を缺如せるに似たり釋迦曰法の本は無法なり。無法の法も亦法なり、今法を授くるとき、法何ぞ會て法ならん」と見る可し是れも亦前文「神に方無し」の義にして法の本は無法なれば、執法者は時と場合とに應じ、巧に法を使用す可き者にして、法を墨守す可きにあらざる也。換言すれば法は使ふ可き者にして守る可き者に非らざる也。其他西洋流の諸學者は率ね常識のみなるが故に政教共に天地陰陽千變萬化の妙用と、常に没交渉にして、東洋の政教を掌る資格無き者多し、抑も東洋の所謂醫道なる者は所謂醫は理也。又意にして獨り人體の疾病を治むるが如き狹義の者にあらず、(下文原病式に曰老子の道教孔子の儒教醫教其道一也)即ち東洋上古の帝者は王と師と醫とを兼たる恩威、智徳、學識俱に備へたる者にて、天に代りて國を治め、民を教へ民を養ひ民の病を治めし者也。即ち伏羲神農、黃帝の如き也。後世醫師仁術の名稱は是れより起れり。されば古の大醫は皆謂ふ、志を得れば良相と爲り、志を得ざれば退て醫卜に隱る」と其自ら持する現代拜金者流の如き陋劣なる者にあらざりき其志の高尙なる専ら國を醫すにあつて、人を醫すは已むを得ざりし也。是れ古來大醫を國手と稱する所以也。又釋迦を醫王と云ふも右と同一なる可し、醫堂に今日の如き利己一偏俗惡なる者ならん

や、故に右の上醫は未病を治し、下醫は已病を治するを常とす。未病とは病を未前に治む。所謂豫防也。夫れ豫防の治たる、天變地異の理即ち天文學に精通するにあらざるよりは、能はざる所なり。素問六元正紀大論等を見て知る可し以上醫師の資格及任務を明にす。

第二章 醫道

第一節 古醫道

前章に述べし如く宇宙唯一の理は陰陽太極にして天地萬類之に由て化成收藏す。此の陰陽太極は相依りて一の働きを爲す。例へば自轉車の如き、兩輪は陰と陽にして、其中心を執る所の腰は、即ち太極なり。又例へば人の歩行するが如き、兩足は陰陽にして腰は太極也。時計の如き螺鐵の屈伸は陰陽にして螺鐵の一本は太極也。舟の櫓は陰陽にして其舵は太極也。機關の水火は陰陽にして氣槽の蒸氣は太極也。天地萬物皆此の理の變化に外ならず、故に太極は亦其極とも云ふ。即ち千變萬化して窮極する所無きを以て也。朱子曰太極分開すれば陰と陽とに當る。陰氣流行すれば則ち陽と爲る。陽氣凝聚すれば則ち陰と爲る。是の如く消長し進退し千變萬化して天地間限り無きの事を做し出し來る。故を以て往くとして、陰陽に非らざる無く、又往くとして太極に非らざるは無し」と老子曰道は一を生じ、一より二を生じ、二より三を生じ、三より萬物を生じ」と亦た朱子の説と同じ」孔子が「一陰一陽之を道と謂

ふ。之に繼ぐ者は善也。之を成す者は性也」と云へるも是れ也。而して其本づく所は我が三種の神器や伏義の易にして、黄帝は素問に於て左の如く云り。

陰陽なる者は天地の道也。萬物の綱紀なり。變化を起す所の父母なり。生殺の本始也。神明の出る所の府也。病を治る者は其本に向て治方を求む可し（神明の府とは靈智の出る所）

是れ東洋醫學の大原則にして所謂醫なる者は理なりと謂へる。廣大無邊、深遠微妙の理を藏す。而て此の理は佛敎に於るも亦同じ、例へば三祖の信心銘に於ても「二は一に由て有り一も亦守ること莫れ、又曰萬法一如なり」と又王陽明曰心は則ち理なり。天下心外の事無く、又心外の理なし、萬事萬物の理は吾が心理に外ならず、故に聖人は天地萬物を以て一體と爲し、天下の人を視て之を安全に教養して、其萬物一體の仁を遂るを欲せざるは無し」と是れ上古黄帝等躬親から天理を究盡し、醫療を施して以て惠を、萬世に傳へ、天下後世の蒼生をして其天壽を全せしめんとせられし所以也。又我が上代に於ても同一の思召を以て禁厭、卜筮、祈禱、醫藥の方を行はせ給へること古典を見て知る可し。大己貴尊や少彥名命の御事跡は何人も知れる所なり。然るに上代の禁厭、卜筮、祈禱等を見て、野蠻蒙昧の術の如く思惟する者あるは、無學愚劣の致す所にして、病原は主として心氣の變動より來ることを知らざるに由れり。誠に考へ見よ、何か大事變の生ずるに逢へば、其方に氣を取られて、何時の間にか、病は忘れて癒るにあらずや、現代醫人の多くは此の心理を知らず、誠に悲む可し。煙雨樓主人長尾氏著の「臆醫弊」と題する書に曰徳川時代に於る、醫家の著書は、醫術に兼るに倫理を説かざる無き、其の當時

に於ては醫學と道義と相並行せしを認む。然るに西洋醫術の採用となり、外國教師を招致して、東京大學の開くるや、此の醫德並行の美風は物質一偏に墜し、漸くにして利己主義と爲り、仁術變じて一種の營業觀を呈するに至れり」と是れ其心學を拋棄し去れるより來れる失體にして、醫は天理なりてふ、根本義を喪失せし所の也。然らば則ち今日の醫は醫の名ありて醫の實無し、即ち醫の智德無く、從て醫の術力も無く、醫果も之れ無きは當然也。然るに無税にて此の營業を許し、剩さへ學士、博士の盛名を興へ國民をして之を過信し、其貴重なる生命を托せしむるは蒼生の爲め甚だ痛歎に堪へざる也。

夫れ醫の大切なる任務は先以て患者の心を治むに在りて、藥劑及び施術は後の補法のみ、何んとなれば「心變すれば體殊なり」とは佛家ですら知る所にして、所謂心外無法也。誠に考へ見よ、身體の主人公は心なり。心の向ふ所體之れに従ふは言を待たざる也。故に黄帝素問に曰心賢明なれば臟腑健全也（意譯）又曰凡そ病を治するには其志意と其病を觀る」又曰志意なる者は以て精神を御し魂魄を收め、寒溫を適し、喜怒を和する所也」又曰志意治まれば精神專直にして魂魄散ぜず、悔怒起らず五臟邪を受けず」と又曰一に神を治め二に身を養ふ」と岐伯曰凡そ刺の眞は必ず先づ神を治む」と又經に其病原を示して曰天に四時、五行有り、以て寒暑燥濕風を生ず。人に五臟有り、以て喜怒悲憂恐を生ず。故に喜怒すれば、氣を傷り、寒暑は形を傷る。暴怒すれば陰を傷り、暴喜すれば陽を傷る。厥氣、上行すれば脈滿て形を去る。喜怒節ならず、寒暑度を過れば、生乃ち固からず」又曰憂恐悲喜怒其次を以てせざれば、大病有らしむ。因て喜びて大に虚すれば腎氣乘ず（喜は心火なり大喜して虚すれば腎水の氣之に

乗す。是れ五行尅の理なり以下之に倣へ。怒れば則ち肝氣乗す。悲めば則ち肺氣乗す。恐れれば則ち脾氣乗す。憂れば則ち心氣乗す。又曰惕怵思慮すれば則ち神を傷る。神傷れば則ち恐懼流淫して止まず。悲哀して中を動す者は、竭絶して生を失ふ。喜樂する者は神憚散じて藏らず、愁憂する者は氣閉塞して行かず。盛怒する者は迷惑して治らず。恐懼する者は神蕩憚して收らず。心、怵惕思慮すれば神を傷る。神傷れば恐懼して自失し、胆を破り肉を脱す（胆は聚筋の處）脾、憂愁して解けざれば意を傷る。意傷れば悞亂して四肢舉らず。肝、悲哀し中を動せば、魂を傷る。魂傷れば狂忘して精からず。陰縮みて攣筋、兩の脇骨舉らず、肺、喜樂極り無れば、魄を傷る。魄傷れば狂し皮草焦る。腎、盛に怒て止まざれば志を傷る（腎の神は志也）志傷れば則ち喜く其前言を忘れ、腰脊以て俛仰屈伸す可からず。恐懼して解けざれば則ち精を傷る。精傷れば則ち骨痿み精時に自ら下る。又曰喜べば則ち氣下る。悲めば則ち氣消す。消すれば則ち脉虚空す。又曰精氣、心に併れば則ち喜ぶ。肺に併すれば則ち悲む。肝に併すれば則ち憂ふ。脾に併すれば則ち畏る。腎に併すれば則ち恐る。又曰悲哀太甚ければ則ち胞絡絶す。胞絡絶すれば則ち陽氣内に動き、心下崩し數々洩血す。又曰思想窮り無く願ふ所を得ざれば意外に淫し、房に入ること太甚ければ、宗筋弛縱し、發して筋痿と爲り、及び白淫を爲す。又曰悲哀愁憂すれば、則ち心動く、心動けば則ち五臟六腑皆搖く。又曰形ち樂み、志苦めば病、脉に生ず。形ち樂み、志樂めば、病肉に生ず。形ち苦み、志樂めば、病筋に生ず。形苦み、志苦めば、病咽隘に生ず。形數々驚き恐れれば、經絡通ぜずして、病下仁を生ず。又曰嘗し貴く、後ち賤人と爲れば、邪に中らずと雖も病、内より生ず。

名けて脱營と云ふ。嘗し富み、後ち貧人となるを名けて失精と云ふ。舉記すれば際限無し、要するに百病皆氣より生ずる也。（病源候論及靈樞百病始生篇）故に醫家たる者は先づ其心氣を治する術を知らざる可からず。故に曰神を治むるを首務と爲す、又曰凡そ刺の眞は必ず先づ神を治とむ。然るに現代の醫家は殆ど全く心學の素養なし、何を以て博士なり醫師なり衛生官なりと稱するを得ん。夫れ心を治むの道は、先づ己の心を修むるを要す。然らずして如何んぞ、他の心を治むるを得可けんや、是れ上文徳川時代の醫師が道術兼學を事とせし所以にして、且つ醫の術たる上古神人聖人の業に屬するが故也。故に黃帝素問方盛衰論に曰是を以て診に大方有り、坐起常有り出入行有り、以て神明を轉ずと（類註に曰是れ醫家の大法也。坐起常有りとは、舉動苟もせず、先づ其身を正ふす。身正しければ心も正し、故に診法は必ず先づ身を正ふす。出入行有りとは、德行ある也。醫は人を活すを以て心と爲す也。出入時たりとも念々眞實にして一も敬せざる所無ければ、其德行能く天地神明を動す。故に轉運周施し往くとして神ならざるは無しと）又曰必ず清に、必ず淨に、上を觀、下を觀ると（類註曰心清淨なれば心志專一にして神明見はる。然て後ち上は患者の神色聲音を察し、下は其形體の逆訓を觀ると）、是れ日本醫聖徳本翁の「無念無想なる診斷法と同一にして無慾なる大家にして始て成し得る所也」次に「其患者の心を治する方法は」本節の末に記す書き落したれば也」

夫れ醫師たる者は上文の如く智徳兼備して天地鬼神と相感する故に、患者の之を信仰すること殆ど神

佛と同一にして、其一言一行直ちに患者を動す。故に、師の名を得て之を醫師と稱する也。然るに現代の醫家及衛生官は醫の名にも師の名にも適する者未だ之を見ず遺憾至極也。

又靈樞經曰粗工（下醫）は形ちを守り、上工（上醫）は神を守る神なる哉神」と是れ所謂如上の神術なり、又曰粗工は關を守り上工は機を守る。機の道を知る者は掛るに髪を以てす可からず。機の道を知らざる者は之を叩けども發せず」と是れ道を心に得て手に應ずる者と、心に道を得ずして手術のみなる者との大差違にして、彼の伊賀越に於る荒木又右衛門電光石火の働と其對手十三人の凡技にも比す可き乎。

千金方大醫精誠論曰夫れ經方は明め難し、病は内同くして、外の異なる有り、又内異にして、外の同き有り。故に五臟六腑の盈虚、血脈營衛の通と塞とは、耳目の察し得る所に非らず。必ず先づ診して之を審にす。而て寸口關尺に浮沈弦緊の亂有り、兪穴流注に、高下淺深の差有り、肌層筋骨に、厚薄剛柔の異有り、唯だ心を用ること精微なる者始て與に語る可し。今至精至精の事を以て之を至粗至淺の人に求む。豈に殆からずや（現代醫政の官人之を思へ）凡そ大醫の病を治むるや、必ず神を安じ志を定め無欲無求にして、先づ大慈の心を發し普く含靈の苦を救はんと思願す可し（今醫政の官人社會の醫家に此の人ある乎）若し來て救を求る者有れば其貴賤、貧富、怨親、智愚等を問はず皆同等に至親の想を爲し、前後を顧み自ら吉凶を慮り、身命を惜む可からず。人の苦惱を見ること己れの身に有るが如く、深く悽愴し嶮岨の地、寒暑、飢渴、疲勞を避けず、一心に赴き救ひ、工夫形迹の心を作すこと勿れ、此の

如きを蒼生の大醫と爲す。此に反すれば則ち含靈の大賊也。古來名賢の治病に、多く生會を（鶏牛等を殺す）用ゆ畜類を賤み人間を貴ぶと雖ども、其命を愛むに至りては人畜相同じ、彼を損し己を益するは、物情同患なり。況んや人に於ておや夫れ生を殺して、生を求むるは、生を去ること更に遠し（天地生生の徳に背くを云ふ）故に吾が方劑には生命を用ひざる也。（此の生命の件に就て現代の動物試験及び學用患者の解剖の如何に慘忍なるや下章に記する所を見よ）只鶏卵の如きは其混沌未分の故に大段。要急の處有れば已むを得ずして隱忍して用ゆ。然れども能く用ひざるを良と爲す」其瘡痍、下痢の臭穢に逢ふも、只憂恤の意を發するのみにて、厭惡の心を起す可からず。是れ吾が志也。

夫れ大醫の體（態度）は澄神内視之を外望すれば儼然に寛裕汪々として皎ならず、昧ならず（前文素問方盛衰論の醫人天地鬼神を動す所以也）其病を省み疾を診するには至意深心を以てして、形候を詳察し纖毛も失ふこと勿れ、又鍼を下し、藥を用るには、參差すること勿れ、病は速治を要するも、事に臨て惑ふ可からず。唯だ能く審に諦にす可し。率爾として自ら俊快を逞ふし以て、譽を求む可からず。是れ不仁なり。（古へ醫を歡待せし習ひなりしならむ）又病家に到るに、綺羅、目に滿るも願みること勿れ、絲竹耳に集るも娛むこと勿れ、珍味に逢ふも無味の如くせよ。然る所以の者は、家人病めば一家樂まず、況んや病者の苦は、暫くも去らざるおや、然るを醫人安然として懽娛し傲然として自得するは人神の共に耻る所至人の爲さざる所也。

夫れ醫の法たる多語、調笑、談諧、諛諂し是非を道説し、人物を議論し、聲名を銜耀し、諸醫を訾毀

し、己の徳を矜り、或は偶然に一病を治し得たを鼻に掛け、自ら許し、天下無双と思ふ可からず。此れ
 醫人膏育の病也。老君曰（老子）人が陽徳を行へば、人自ら之を報ゆ。人が陰徳を行へば、鬼神之に報
 ゆ。人が陽惡を行へば、人自ら之に報ゆ。人が陰惡を行へば、鬼神之を害す」と此の二途を尋るに陰陽の
 報施豈に誣へんや（間違なきを謂ふ）故に醫人は己の所長を恃みて専心に財物を經略す可からず。但だ
 苦を救ふ心を作ば、冥運の中に自ら多福を感じんのみ、又彼が富貴を見て、處方中に珍貴の藥を以て
 し、彼をして求め難からしめ、而て自ら功能を衒ふ可からず」云々

〔因果應報〕今の人は善惡の應報嚴なるを知らぬ故に目前の利に迷ふて惡業を爲す。此れ其知識足らざ
 るが故なり。又學問博からざるが故なり。抑も因果の原理たるや陰陽太極の變化即ち反動より生ずる者
 にして、決して佛者のみの説にあらず、孔子の如きも易に於て「積善の家には餘慶有り、積不善の家に
 は餘殃有り」と示し、又禮記に於て死後の應報を述べたり（拙著神道神武興國論に記す）又易に於て
 「仰て天文を觀、俯て地理を察し以て幽明の故を知る始を原ね、終りに反り、以て死生を知る。精氣の
 物たるや游魂と爲りて變化を爲す。故に鬼神の情狀を知る」と全く佛説と同じ、又易に於て曰君子其室
 内に於て其言を出すに善なれば則ち千里外の者之に應ず、其室内に於て其言を出すに、不善なれば則ち
 千里外の者之に違ふ、言行は君子の以て天地を動す所也」と又曰天の助る所の者は其順なるを以て也。
 人の助る所の者は其信なるを以て也。又曰無思無爲寂然不動にして、感じて天下の故に通ず」と程明
 道曰天地間の事は唯だ感應のみ、更に別事無し」と即康節曰人が未だ思慮せざる中は、鬼神も其人の心

を知らぬけれども、何か思慮する所あれば忽ち之を知る」と張介賓曰人の一念僅かに萌せば直ちに氣に
 達す。鬼神は其氣に隨て之を知る。誠に畏る可し」と其氣なる者は何ぞや、是れ所謂宇宙間に充滿する
 所の陰陽太極にして恰も一壺中の水の如し、今其壺中に一念を起せば響音の傳ふが如く、磁石の鐵を吸
 ふが如く、感通す。電信、電話、電送、千里眼、天耳通、宿命通、老狐の前知、哲人の豫言、催眠術等
 皆是れ也。釋迦曰山河大地は皆人心中の物なり。世人は惑ふて心を胸中の者と思へり（首楞嚴經）禮記
 に曰人は天地の心なり。王陽明之を説明して曰人は天地萬物の心なり。心なる者は天地萬物の主也と、
 是れ天地人の三才を分説すれば天地は宇宙の體にして人は其心なりとの義也」老子も莊子も皆云ふ人は
 天地を官にすと其意人は宇宙の君にして天地は其官吏なり」と孔子は易の繫辭第一章に於て、人は天下
 の理を得て位を其中に成すと謂へり。亦前文の意也。又其第四章に於て「天地の化を範圍して過さざら
 しめ、以て萬物を曲成して遺さす」と謂へり。其意天地の氣を調節して、過不及無らしめ、萬物を成育
 せしむとなり。又大公望は兵書の六韜に於て「陰陽を調和し、萬民を樂ましめざる者は我が宰相に非ら
 ず」と云へり。是等は皆前文孔子の所謂君子の言行は以て天地を動す所也。又中庸に「唯天下の至誠能
 く天下の大經を經綸し、天下の大本を立て、天地の化育を知ると爲す」とあり。又曰至誠の道以て前知
 す可し、國家の將に興らんとするや、必ず禎祥有り、國家の將に亡んとするや、必ず妖孽有り。故に
 至誠は神の如し」と是を以て日蓮大士の如き、元寇を前知して苦言を北條氏に呈せり。尋で弘安の役に
 及ぶや、上皇と俱に敵國降伏を天に禱れり。又大旱には鎌倉に於て雨乞を爲せり。今我が住する地の附

近に其舊跡を存す。王陽明の如きも國家の爲めに雨乞を爲せり。是等皆至誠を以て天地を動す所也。加藤清正の如きも「拙者軍功の儀は大日本は申すに及ばず、異國にても手にたつもの候はず、是れ偏に高祖大師を頭にいたゞき申す故」と云へり、又孔子は「丘か禱ること久し」と云ひ。或は我祭に與らざれば猶ほ祭らざるが如しと云へり。然るに現代の人士は、無學文盲にして物質學の偏に溺れ、民を救ふにも小刀細工のみにして上文天地の氣を調べて國家を安ずる道を知らず、又祈禱、卜筮などを以て蒙昧時代の迷信と心得、神國に生れて神を知らず、儒佛老莊耶、諸子百家を知らず、古今の歴史及び事跡を知らず、從て智に意識と潜在意識と靈智の三者あること（此れ心裡の陰陽太極也）すら知らずして、僅かに歐米人意識のみの學を此の上無き者と妄信せしの結果は眼耳鼻舌身意の六識（佛家之を六賊と稱し又六根と稱す即ち六惡の根也）を以て萬事を判斷し得可き者と心得、一に顯微鏡を偏信するの局は、微菌を以て諸種の病原と爲し、之れが爲めに眞の病原研究を抛ちしかば、萬病中一病たりとも完全に治するを得ず。其證據は肺結核治療の無効にして年々歳々患者の數を加へ、世界第一の肺病國と稱せらるゝに及んでも仍ほ耻ることなく省る所なし、我深く之を遺憾とし、十數年前より微菌説の誤謬なることを論證し、且つ其治療方を記し或は雜誌に或は冊子として當局者にも提示したれども、依然として顧みられざりき、是の如くにして天下非命に死する者其幾千萬人なるを知らず、然らば則ち醫者も醫政も無くして國庫の濫費無きを以て國民の大幸と爲す。又邊村に庸醫を配置するが如きは以ての外の心得違にして、小兒に利刀を揮はしむるが如し。此の事は先日潮内相に申告し置けり」又一般政教に關しても其弊

害は同一なる意識觀より來れり。即ち意識を以て靈智と誤認し之を以て萬事を處し、皇祖皇宗の遺訓たる三種神器の意義に逆行する所に在る也。即ち佛家の所謂賊を認めて子と爲す結果は、知識を以て眞智と誤り、法規を以て天則と同視し、三種神器の陰陽太極にして神通妙用變化極り無く、而も其中心を失はざる絶對的妙旨に悖るが故に、萬事行き詰り、人は皆色慾名利の奴隸と爲り、官公吏の犯罪最も甚しく、倫理亂れ、父子夫婦兄弟相奪ひ相殺し、男女の心中、同姓の心中、學家の自殺開關以來未曾有の不祥事頻發し、訴訟の山積、囚人の夥しき未だ嘗て見聞せざる所也。

現代の如き外國の法治制に倣ひ、法網を密にして、安寧を保持せんと欲するが如きも、是れ亦前同様なる意識一偏の思想にして、皇道神器の道に反せり。抑も外人は相對性を知るも、三即一、一即三の天數を知らず、夫れ〔相對〕なる者は、所謂積極消極にして其數二なり。二なる者は偶數にして、陰に屬し地に屬し人に於ては女也。（三即一は即ち三種神器也陰陽太極也）三即一なる〔不相對〕は奇數にして、陽に屬し天に屬し人に於ては男也。而て天地人三才を兼攝す、太極是れ也。又二は物質にして、三即一は無物質にして物質を兼ぬ。又二は其形方にして、三は圓也。夫れ物の圓なる者は、運轉自在にして、方は轉運すること能はず、故に歐化學者は、一理一物を固執して、頑硬善に従ひて、相移る雅量無きを常とす。是れ我が實驗する所にして、諸學改良上痛感する所なり。智者は水を愛す。總ての政教皆善に隨ふて移るを要するなり。次に二即ち相對性は、幾何學上の並行線也。並行線は何處迄も對立して相和せず、故に一法を立れば必ず其反對には其法を通る道あつて生ず。例へば銃を發明すれば楯生

じ、飛行機を造れば高射砲出来が如し。是を以て千法萬律を立るも、犯法者轉多きを知る。之れと同時に此の心を改めざれば、人種戦は到底免るゝこと能はず。是の如き、大害ある意識一偏の見は、天下後世の爲め速に改めたき者なり」孔子曰訟を聞くこと我猶ほ人の如し、必ず訟無らしめん」と老子曰天網恢々疎にして漏さず」と漢の高祖は法三章を約して天下平なり」是れ何の謂ぞ、老子曰法令滋々彰れて盜賊多し、故に我無爲にして民自ら化し、我靜を好て民自ら正し、我無事にして民自ら富み、我無欲にして、民自ら樸なり」又曰智を以て國を治むる者は國の賊なり。智を以て國を治めざる者は國の福なり」と又曰民を治るは小魚を煮るが如し。攪き亂だせば破碎す」と帝堯曰天下を治る。我何をか爲さんや唯だ天地のみ」と言ふ心は天地の如く自然に任すぞのみ」孔子曰大なる哉堯の君たる魏々乎たり、唯だ天に則る」文王、太公望に治國の道を問ふ、太公望答て曰民を愛するのみ。文王曰之を愛する道如何ん。太公望曰利して害すること勿れ、成して敗ること勿れ、生して殺すこと勿れ、與へて奪ふこと勿れ、樂ませて苦むること勿れ、喜ばせて怒らすこと勿れ。文王曰其實行如何ん。太公望曰民其務を失はざるは之を利する也（現代の如き無益なる選舉肅正などに民をして其務を失はしむること甚し、古は土木に民業を妨ぐる暴君多かりき）農其時を失はざるは之を成す也（孔子曰民を使ふに時を以てすと是れ也）刑罰を省くは之を生ずなり。租税を薄くするは之を興ふる也。宮室臺榭を儉するは之を樂ましむるなり（古は宮殿等を造營するに民を使用せり）吏清くして苛擾せざるは（賄賂を貪らず又今日收稅官の如く誅求せざる也）之を喜ばすなり。民其務を失ふは之を害するなり。其時を失ふは之を敗るなり。罪無き

に罰するは之を殺すなり。租税を重くするは之を奪ふなり。多く宮室臺榭を營み以て民力を疲すは之を苦むるなり。吏濁て苛擾は之を怒らすなり。故に善く國を治むる者は民を馭すること父母の子を愛するが如く、兄の弟を愛するが如く、其饑寒を見ては之が爲めに憂ひ、其勞苦を見ては之が爲めに悲む。賞罰は我が身に加るが如く、租税は己れに取るが如し。此れ民を愛するの道也と現代の失業救済は却て民をして依頼心を生ぜしむ。古の救済は本文の如く眞の自力更生也。此の方は政治のみに非らず、醫治衛生其他總て自助を用るに利あり。故に莊子曰未だ國を治むることを聞かず。只其害を去るのみと（第四章第一節天然自治の理も亦同じ）

大監中齋も亦曰一事を興すは一害を除くに如かず。政道は實に其害を去るのみ」と又遽伯玉、宰相と爲る。子貢行て問て曰何を以て國を治るや、伯玉曰不治を以て治む」と醫の如き藥を用ひずして、病を治むる者は上醫也。藥劑は妄りに用ゆ可からずと、是れ扁鵲の言也。今の人多く死するは之を知らざる故也。古賢曰無治は中醫に價す」と貴顯富豪の徒に、天折多きは、皆治を用る爲めなり。愚なる哉顯豪、今の衛生の局に當る人僻村に醫師を配置せんと擬す。大に省願を要す。禽獸に病無くして人間のみに疾ある點をも併せて考慮せられたし。

此の道は前にも述る如く天地の道なれば、陸海軍外交其他の官人も亦學ばざる可からず。今や、我が國は風俗壞れ倫理廢れ禮義廉耻地を拂ひ、淫蕩奢侈に盈ち、阿部さだの如き妖怪婦を出し、男女及同姓の心中日として聞かざる無く、全家族の自殺さへ毎日の新聞紙に見へざるは莫し、何等の悲惨ぞ。是

の如き不祥は殷の亡滅時にも之を見ず前記「國家の將に亡びんとする必ず妖藥ある」者にあらずや、是の如くならば、如何に國策を議し、兵備を謀るも、何の効かあらん。是れ其本を治めずして其末を勉むる者にして、底無き桶に水を汲むに等し、畢竟する所道源の不明に由る。夫れ醫道は決して狹隘なる治病のみにあらず、天下國家の患を治るを以て本旨とす。天下國家の患を治むれば國內の民皆幸福を得る。否らざるが故に、現在如上の妖藥を見る也。非命の死を出す也。是の如くならば敵國無くして自滅す可し、何の國策があらん、何の兵備があらんや、冀くば諸君之を熟慮せよ此を外にして國體の明徴も諸政の革新も決定して無し。我不肖なりと雖ども苟も古醫道を學ぶ者斯道の爲め之を論ぜざるを得ざりし也。

〔上文患者心治の方〕上文に於て醫の大切なる任務は、先づ患者の心を治るするに在りと論ぜり、然るに眞心を治るの術を書き落せり故に茲に之を追補す可し。素問陰陽應象大論に曰（撮記）肝臟は五味に在ては酸と爲し、志に在ては怒と爲す。怒れば肝を傷る悲は怒に勝つ」言ふは怒病を治するの方は悲感を患者に起さしむる也。即ち悲む可き話等を聞かしむ、是れ五行の理に基く、即ち肝は五行に於て木なり。悲憂は五行に於て金なり。故に金を用て木を尅する也。藥劑としては辛味を用ゆ辛味は金の味也。是亦五行尅也○心臟は五味に在ては苦と爲す志に在ては喜と爲す。喜べば心を傷る、恐れは喜に勝つ」即ち喜病とて笑て止まざる病を治するには、恐る可き話などして患者を恐れしむ、是亦五行の尅也。恐は五行に於て水なり。心は火也。水を以て火を尅する也。藥劑としては鹹味を用ゆ、鹹は水の味

也。是亦五行の尅にして肺結核内熱に必ず精液を増す藥を用ゆるの類○脾臟は五味に在ては甘と爲し、志に在ては思と爲す、思へば脾を傷る怒は思に勝つ」即ち思案に過て起る病は、怒る可き話などして聞かしむる也。怒は五行に於て木也。脾は五行に於て土也。木は土を尅する故也。藥劑としては酸味を興ふ、酸は木の味也○肺臟は五味に在ては辛と爲す、志に在ては悲憂と爲す、悲憂は肺を傷る喜は悲憂に勝つ」即ち患者をして喜ばしむ、喜は五行に於ては火也。肺は五行に於て金也。故に金を尅する也。藥劑としては苦味を用ゆ、是れ火の味也。○腎臟は五味に在て鹹を爲し、志に在ては恐と爲す、恐は腎を傷る、思は恐に勝つ」恐多ければ腎を傷る、思は五行に於て土也。腎は五行に於て水也。故に患者をして思案せしむる術を施す也。是れ土か水を尅制する也。藥劑としては甘味を用ゆ、是れ土の味也○其他患者心機轉變の方策は、醫師たる者の才智次第なり。例へば逆上の患者には脚部に毒瘡を生ずる恐れありと偽り告げて、氣を下さしめ、或は母の死を悲み之れが爲めに病を起せし婦人の憑靈を信する者に、靈媒を使用して其悲病を治せし例などもある。其他卜筮、祈禱等時に臨み、變に應じて施す可し、釋迦が四十九年の説法、一字不説、藏經五千卷悉く不淨を拭ふ紙とは、此の機智を謂ふなり。何者の癡漢ぞ、卜筮、祈禱等を擯斥し、小理屈を述べ、畢竟是れ自己の無智を告白する者也。昔し文珠、善財童子をして、藥にあらざる者を探らしむ、善財復命して曰大地皆藥にして一の非藥にして一の非藥物なしと、要は之を用る者の巧拙のみ、古人馬糞を吐劑に用ひしが如き其一例也。學者は能く其本を知り其末を知るを要す、今の學者は事物の一小片を知るのみにして、本末俱に知らざる者多し。

張氏診宗三昧に曰醫書日を追て繁く、其見る所、愈く卑く、悉く他の狐涎を竊取て長文を列ね、片言の自己胸中より發する無し、吾之を排し教外別傳を唱ふ（見る可し古醫は禪をも學びて心を明めしを）此れ汝等が坑塹に墮るを欲せざる故也（文字に捕はれぬためぞと也）此の道たるや大丈夫の事に屬す、故に造化の權を奪ふ底の、天下の生民を救ふを以て己が任と爲すに非らざれば、不可也。否らざれば病症を審にし、確認するを得ず、何そ回天の偉功あらん、有志の士は先づ、素問、靈樞、傷害論、金匱要略の四經を明らむ可し。一朝悟入すれば洞然として火を観るが如し、然して後ち諸書を看れば他人の爲めに誤まるゝこと無く、諸家の書の如き刃を迎へて解く、是れ他無し吾が胸中に眞主在て存すれば也。是れ即ち禪家教外別傳の法と同じ。故に眞學は總て獨學自悟に限る。他人より受る講演は淺薄にして物の用に立たざる也。故に苦學の人に俊傑多し、杉山の檢校妙手の源も全く苦學懸命自悟なる可し。餘の諸學も皆獨學なり。又一藝ある者は諸藝に達するとの諺は、一藝の奧義は諸藝の奧藝と其歸を一にすれば也。而て其一とは他なし陰陽の太極を攬む也。之を悟入と稱す、又凡そ讀書の方は疑ふ所あらば、再三考へて見て、猶ほ了解せずば、其まゝ先きを讀む可し。強て疑を解かんとすれば、凝滯して天理に戻る。故に王陽明日疑は速解すること勿れ、時節因縁を待つ可し。後日爲す了解するの時ありと。又學問の方は先づ其原理なる太極を攬むに在て、博學は其後の事也。若し單に博學に耽れば茫々たる外洋に遊ぶが如く、遂に論語讀みの論語知らずとなり實用を爲さざる也。

第二節 日本の古醫道

此れ漢醫道と現代洋醫道との中間に在る者なり。記して現醫道の墮落を反省せしむ

○日本の神醫、甲斐の扁鵲なる永田徳本先生は毎に牛に跨り小囊を其角に掛け四方に周流し、病者ありて藥を乞へば、一貼を十八文にて與ふ、富貴の人に對しても、同價也。貧者には施して受る所無く、枯淡無欲超然脱俗の人也。寛永の始め二代將軍秀忠公、不治の難病に罹られ、國手治する能はず、先生時に百餘歳、招かれしかば、一の瘦せ牛に跨り、到着して殿に上り、一診して峻劑を投じ、積年の痼疾癒ゆ、將軍喜び賜ひ又之を祿せんと欲す、先生固辭して受けず、藥價十八文を度支部に徴して去る、官其志を悦び、米千俵を賜ふ、辭すれども辭せられず、己むを得ず受けて、村民に散賑せり、是れ高僧道元禪師が北條時頼の寄附せし數千貫の田園を辭して受けず、又日蓮上人が北條氏の寄附田地を受けざりしと共に、恬淡無欲なる聖者の行履なり。醫にせよ僧にせよ此の無欲こそ聰明神枝の出る源たるを知る可し。多欲無徳にして何の妙術があらん、故に曰之を心に得て手に應ずと、庖丁の解牛即ち其例證なり。

○阪東策菴は其候に召れて病を診す、其侍醫と意見を同ふす、侯強て其投藥を請ふ、辭して曰侍醫と同意なり。人の治を奪ふは醫の耻る所也と其無欲廉潔尙ぶ可し。

○戸田旭山は義を見て流涕し不義を聞て怒る、療治して病者死すれば、一切其家の謝を受けざりき、又禮金過多なる時は其餘分を返却せり、其廉潔斯の如し。

○太田見良は上等の藥品を買ふに、其價を問はざりき、(後の福井楓亭下參閱)曰「價を聞けば吝嗇りんしやくの念上ず」と現代醫の下藥を用ひて藥九倍以上に販く者と、全く反對也。師は禪を學び、又賣茶翁と親みたりと云ふ

○越智平菴は頗る施與を好み、君公賜ふ所を手隨て人に散し、家に餘財なし人の疾苦を見れば施療し兼て研學に従ふ、閑雅清廉寡欲にして、八十五の長壽を得たり。

○望月鹿門は國手なり。嘗て乞食の痘瘡を病むを見て湯藥を製し人をして贈らしむ。常に曰醫豈に病者の貴賤を問はんやと現代の醫家以て如何と爲す。

○後藤良山は至孝なり。父の逝くや慟哭悶絶す、三日食はず、三旬墓所に寝ね、三年酒肉を食はず、治を求る者甚だ多し、門人二百餘、藥を施し患を救ふ、親切懇倒、貧者を賑し、遠路の往診を厭はず、其門人を導くや醫道を説き徳義禮節を以てせり。

○伊藤茂臣は孝子の病者有れば、涙を流して之を救ひ、其貧を見ては施與せり、常に曰醫は賢否親疎を問はずして治す可しと。

○北山友松は學問博く、卜筮を兼ね、又禪に參す。其治に従ふや、富人にして謝金輕少なれば面橋して之を却け、貧者に向ては、施療せり。債主來り責れば、高聲に叱して曰近日病人なしと、一日尾張侯の疾を療し謝金を得るや、歸り來りて、門に標して曰大金を得たり。債主皆來りて收受せよと、晩年千金を積み慈善を以て終る。

○望月雷山は年老て禪を好み。終命には琴を鼓せしめ奄然として逝けり。

○奥村良竹は時人争ふて招く、然れども富貴の家には直ちに往かず。貧賤の家には一言の下に到る。

○帆足通禎は賑施を好む。謝物を得れば輒ち散して曰君子豈に貨殖せにたむるせんやと。

○福井楓亭の醫業を始るや、藥種商と吳服商を召て告て曰、藥は醫療の根本にして人命の係る所也。故に其上品を精選す可し。次品を持參すること勿れ。我下直を見れば鄙心生じ、或は粗品を用ひ吾が初心に違ひ、人命を輕視せん。其罪逃る可からず。絹布は是に反す美麗奇原の物必ず持ち來ること勿れ。其價卑く速に做るも、何ぞ咎めむ、我若し佳物を見れば意欲有り。驕奢きやうしや萌さん」と古人の慈徳を養ふ心掛眞に尙ぶ可し。

○賀川子玄は九十月の頃毎朝貧民屈を巡り兒童の寒衣を着けず遊ぶを見れば、綿入を買ふて翌朝兒童に着せて廻るを樂と爲せり。又寺門に乞食の集るを見ては、多く粥を作りて施したり。

○攝津の老醫義齋と云ふ人は、遠近の別なく貧困者には施藥せり。又病後極貧の者には米薪を贈せり。一日領主より召されしに義齋の衣服垢着たるを見て、御府衣一重を賜ひ、義齋に着せられたり。義齋喜びて退きけるに、途中にて一の老乞食の病に苦みて、叫び居たるを見て、之を憐み藥を出して與へ今日寒し破衣にては凌ぎ難からんとて、上に重ねし衣一領をぬぎて、乞食に着せ翌また見舞ふ可。大事にせよと云捨て、歸りぬ。次の朝義齋此の處を通りけるに、二三人の下侍さむらいが彼の乞食を捕へて打ち居れり。いかなる譯ぞと問ふに、此乞食御府衣をぬすみて着たる故と云ふ、義齋驚き、是れはきのふ

我が與へし所なり。彼盜みたるにあらず。いざさらば我府衣を取りかゆ可しとて、義齋路上にて赤裸になり。我が衣をぬぎて、乞食に着せ、今迄乞食の着てありし、御府衣を其儘我身にまといて御殿に出でたりと嗚呼尊い哉其境界

○川村壽菴は讀書を好み、書數千卷を藏す。天明度の饑饉に、故舊窮迫す。壽菴即日藏書を賣り金を得て之を贈れり。大監中齋先生亦之れと同一なり。嗚呼何ぞ其仁慈の深厚なる。

○百々晚峰は座右に一瓶を置き、水を畜へ、謝金來れば其數を算へず。其中に投じ、包紙の敗爛せし後ち、金を取て貧人に施せり。是れ謝禮の多寡に因て、待遇を異にするを、自ら警戒せし也。嗚呼尊い哉。

○豐浦元貞は其藥室に竹籃をかけ、謝金を之に投じ、債主をして就て取り去らしむ。是の如く無欲枯淡なれば必ず其技術神妙に達する者也。

○中神琴溪は其侯の疾に招かれ療して癒ゆ、大夫某謂て曰寡君宿痾一朝洗ふが如く、其恩や厚し、惟だ多く劇藥を服せり。後ち宜しく臟腑を調滋す可し。冀くば其法を授け、全功を收むるを得ば幸甚と、中神答て曰某は疾醫なり。藥石を受て臟腑を養ふを知らず。請ふ大夫の爲めに眞略を陳べん。夫れ賢を進め能を擢で、奸を黜け、佞を貶し、忠良側に侍す。心の養なり。逸麗妖艶の色を遠け耽荒淫惑の行なき、是れ賢の養なり。珍羞口に餐かず。綺羅身に襲ねず、飲啖節あり。起居時を以てす、即ち胃脾。自ら和す。日に典籍を弄び而て雜戲前に陳せず、耳直言を容れ、而て淫聲側に奏せず。心賢内に安

く、聰明外に蔽はず。則ち營長衛育以て尙ることなし」と現代此の外科醫ある乎。

○堀内素堂醫論の要に曰學積て徳と爲り、徳發して術と爲る是れ君子の醫也。

○徳川將軍の侍醫古橋氏は毎日將軍の脈を見る手にて、卑ひ仕切場の者の脈を見て藥を與へた、將軍も之を最もと感心された(醫藥國營論)

○醫業國營論一節のには日本の醫育は從來獻身的の努力と道學が伴ひ、醫人の品性は概して高尚優越であつたとて、現代醫の低級俗悪なる品性に其反省を求め、又文部省の反省を促し、大學の講座に道義を設けず。爲めに古醫の道義品性は遺憾なく破壊し盡されて居るを論し古醫丹波康頼の「醫心方」梶原性全の「萬安方」の如き醫方に道義を論して居ることを説き、又竹中通庵の醫病論に諸聖賢の道に暗く、富貴を羨むの非違を責めし文を載せ、又加藤謙齋の「病家示訓」を著し病家の爲め醫者の擇び方を教へて居ることを擧げ、又香月半山の自家多年の經驗から醫人の道義を論じて居る次第を記し、之に反して明治、大正年間醫人の著書中には青年男女の劣情に媚びやうとして、出版された性欲の者が多く未だ醫人の道義に關したる著書一つも見ないと憤慨して居る

○町醫小川笙船は貧民救助の爲め施藥既に設置のことを建議し、將軍徳川吉宗公大に感し養生所を起し救療事業を開かれし事を詳述し、其受療手續の簡易なりしことを擧げて「今日恩賜財團濟生會受療の手續は、病者が警察署其他の官公署に願ひ、貧困の證明を受ける等煩雜であるから、其恩澤に潤ふ者が寡ひ、古に比して道義が生れず人間を牛豚の如く切開する技術のみ誇る人々の出現であるを浩歎し

て居る。

○同書は幕府の醫學館の事を詳記しあり。是れは政府に於て漢方醫學校を興すに必要な参考と思ふ、今其要を抄記すれば。

教課の制を見るに先づ四書五經から「素問」「靈樞」「難經」「傷寒論」「金匱要略」などを學ばせ外科としては「外科正宗」眼科としては「審視瑤函」鍼科としては「鍼灸資生經」「十四經發揮」小兒科としては「少小嬰孺方」本草科としては「本草綱目」其講師は某某尙別に藥品會あり。圖書館あり臨床實驗科も備て居た云々

○又同書畑黃山の醫學院は黃山惟和の私立で英才を教育せし者である。

彼れは儒者を聘して六經、孔子の書を講ぜしめて、本を立て而後ち醫經に入り、終りに方術を學ばしめた。以て古醫の品格の高尙に其抱負の卓抜を知る可きである。

〔醫經〕は素問 靈樞 難經 甲乙經 脈經

〔經方〕は傷寒論 金匱要略 肘後方 諸氏遺書 病源候論 千金方 千金翼方 外臺秘要

〔兒科〕は幼幼新書 陳文仲方 饒仲陽方 治幼心法 嬰童百問

〔女科〕は婦人大全良法 女科準繩 濟陰綱目 產寶百問 便產須知 保產萬全書 達生論

〔瘍科〕は瘡瘍經驗全書 外科正宗 外科樞要 外科百効全書 外科精要 外科集驗方 外科大成

瘍科選粹 附り龍木論 明日良方 眼科全書 銀海精微 口齒類要 微瘡秘錄 痧脹玉衡

〔鍼灸科〕は銅人鍼灸圖經 明堂鍼灸圖經 徐氏鍼灸經 資生經 鍼灸聚英 神應經 經俞選 十四

經發揮

〔本草科〕は證類本草 本草綱目 救荒本草 食物本草 大和本草

以上七科を本科とし此外に品格養成の課程として經、史、子、集の中より切要の者を採て必ず講習せしめ毎歲試験を行つて篤學 勤行 詩文 診候 藥業の五科の優秀な成績を示した者でなければ席を進め成業の證書を與へなかつた。此の黃山は朝廷の醫師であつた。今の玄關と自動車と金時計と聽診器にて患者を感嚇する者と比し又は人間を解體し接合することのみを教ふる今の醫育と比し奈何なる感がある述べてある。

編者曰往年政府が漢醫學を禁止せし爲め、古醫書は多く廢れて古紙と爲り存する者頗る寡く之を學ぶ者困難なり。就ては政府に於てあらゆる古書を天下に索め、良書を撰び和譯出版して之を救はれたし。是れ今日の急務政府當然の任務なり。

第三節 日本の現代醫道

日本現代醫の事は上文中にも論じたけれども第三章殊に第四章に於て大に之を論ず可し。

第三章 古醫學術

○千金方に曰凡そ大醫と爲らんと欲せば、必ず素問、甲乙經、黃帝鍼經（靈樞經）明堂流注、十二經脈

三部九候、五臟六腑表裏、孔穴、本草、藥對を暗記す可し。張仲景、王叔和、阮阮河南范東陽張苗
 靳邵等の經方、又妙解す可し。陰陽祿命諸家の相法及び灼龜の五兆、周易の六壬並に精熟す可し。此
 の如くならば、大醫と爲るを得る。若し爾らざれば目無くして、夜遊するが如く、顛殞を致す。次に
 此の千金方を熟讀し、妙理を尋思し、意を留て鑽研す可し。始て與に醫道を語る可し。又群書を涉獵
 す可し。何んとなれば、若し五經を讀まざれば、仁義の道を知らず。三史を讀まざれば古今の事を知
 らず、諸子を讀み事を視ざれば、默して之を識らず。內經を讀まざれば、慈悲喜捨の徳を知らず。莊
 老を讀まざれば、眞に任じ運に體する能はず。則ち吉凶拘忌、塗に觸れて生ず（莊子老子を讀まざれ
 ば天真天命に安ぜず。吉凶に捕はれて、自由を得ず）五行休王（休王とは五行に盛衰あるを云ふ）七
 耀（七星の運行）天文に至ては、並に頤を擲る可し。若し能く具へて之を學ばゞ醫道に於て、滯る所
 無く善を盡し美を盡さん。

○老子曰天下始有り。以て天下の母となる（太極）既に其母を知て復た其子を知り（陰陽の千變萬化し
 て生ずる一切事物即ち天文地理星宿より藥石の類に至る迄）而て復た其母を守れば、身を没する迄
 殆からず」と是れ大醫の學也。故に大醫たる者は萬理に精通すると同時に、太極なる中心即ち中庸の
 徳を失ふ可からざる也。前文千金方の教へより、更に密なり。是れ天網恢恢疎にして洩さざる者と謂
 ふ可し。如上の義を以て和漢三才圖會の如きも、天下の諸事物殆んど洩す所無く滿載し、又本草綱目
 の如き、殆んど古今の諸醫書天下の藥石載せざる所無し、現代醫書の如き粗なる者ならず。現代醫書
 の如きは九牛の一毛にも當らず。

○黄帝素問の序に曰昔し黄帝身を修るの餘を以て天下を治め、民の疾を救はんが爲めに、岐伯と天紀を
 窮め、地理（草木玉石其他地に屬する者一切を指す）を極め以て萬世に福す。其後雷公秦和、越人（
 扁鵲）倉公、張仲景、皇甫謐、楊上善、全元起、王太僕等相受て、三皇（伏羲、神農、黄帝）の遺文
 爛然として觀る可し。然るに惜哉唐に至て之を醫學に列し、之を執技者流（醫者）に付して、薦紳先
 生之言ふ者罕れなり（此の書本來政治書にして治病のみの書にあらず。宇宙一切の事理を備ふ）且
 つ聖を去ること已に遠く、其術曖昧して、人、帝王の高致、聖賢の能事なるを知らざるに至れり、堯
 は之に由て四時を授け（民に）舜は之に由て七政を齊へ禹は之に由て六府を修めて、帝功を興し、文
 王は六子を推して以て封氣を叙へ（周易を造りしを云ふ）伊尹は五味を調べて（湯藥を作る）以て君
 を致し、箕子は五行を陳べて以て（蓋し書經の洪範）世を佐く、其致一也、奈何んぞ、至精至微の道
 を傳るに、至下至淺の人を以てせし也（俗醫を指す）其廢絶せざりしは幸也云々之を以て身を治めば
 以て患を未兆に消す可し。政治に施さば以て生を無窮に廣む可し」と誰か言ふ漢方は野蠻未開の實驗
 に過ぎずと誠に此の素問を閲讀せよ、一頁だも讀下するを得ずして退却す可し人誰か意識を以て、神
 聖の意を解するを得ん。

○王太僕即ち啓玄子が素問の序の要に曰夫れ夫れ縛を釋き艱を脱し、眞を全ふし、氣を導き、民を仁壽
 にし、以て安からしむるは、仗義神農黄帝の道に非らざれば能はず。然れども其文簡にして、意博く
 理深し、天地の象、陰陽の候、變化の由、死生の兆、謀らずして遠近自ら同く、約すること無くして

幽明契ふ、其言を稽に、微有り。事に驗するに、成はず誠に至道の宗、奉生の始と謂ふ可し。之の道を研究し、眞要を得るときは、其見全し、是れ鬼神の幽贊の如し、是の如きの俊傑、時々間出ず周に奉公有り、漢に淳于公有り、魏に張公華公有り。皆斯の妙道を得る者也（何者の愚者ぞ素靈を以て後世の僞作と誹る、思ふに之を讀み得ざる者の遁辭のみ）皆日に用て、大に民を濟へり、天の賜也我若年より道を慕ひ、幸に眞經に遇ひ、以て龜鑑と爲す、世本錯誤不倫、文義懸隔して、閱し難し、乃ち精勤し、博訪し、十二年を歴て、群疑釋け、此の書成る、時に大唐の寶應元年也。

○劉守眞の素問玄機原病式の序の要に曰夫れ醫教の源は伏羲より神農に流れて、黃帝に注ぎ、萬世に行はん、無窮に合し、大道に本づき、自然の理に法とる。孔安國の序曰伏羲神農黃帝の書を三墳と謂ふ三墳は、五典の本也。常道（人倫五常の類）無きに非らざれども、但だ大道を以て體と爲し、常道を以て用と爲して、（體は本也用は末也）天下の能事畢る、然れども、其玄機、奧妙、聖意の幽微なること、浩浩乎として、測る可からず。之を習ふ者は賢智明哲の士に雖も、容易に悟り得可きに非らず。周の代に及びて、老子以て大道に精くして、専ら道教を爲す（俗儒老子の道を以て虚無と爲し治國に適せずと爲す、支那に於ては荀卿、日本に於ては宇惠の徒也。其見卑賤にして、此の三墳に基き、大道に精通せしを知らざる也。老子は孔子の師とせし所、其道高遠なり。天下の政治に與る者、必ず讀まざる可からず。是れ三墳の書を縮約せし者にて、（僅かに八十一章六十三枚の紙丁に過ぎず切に之を勸む）孔子以て常道に精ふして、専ら儒教を爲す。是に由て儒と道との二門の教と爲

る。然れども其祖に歸すれば則ち三墳の一教也。二教の書を以て、三墳の經に比較すれば、説明する所ありて義理照然たり。故に諸子百家之を宗として、著述する者多し、黃帝の後、二千五百餘年にして、漢の末に、南陽の太守張仲景有り。（張仲景）生民多く傷寒を病む、因て、古經に考へて傷寒卒病論を述べ、後の學者をして、依據あらしむ、然して其論諸病に及ばず、若し能く意を以て之を推せば則ち思ひ半に過ぎん（蓋し傷寒論の理を推して諸病治を爲すの意）夫れ三墳の書は大聖人の教也。法は天地に象り、理は自然に合し、大道に本づく、仲景は亞聖也。仲景の書未だ聖人の教を完備せざるも、亦聖人に幾し、文も亦玄奧にして、今の學者の難解と爲す所なり。故に今人の習ふ所は、皆近代の方論のみ、但だ其末を求めて、其本を求めず。況んや仲景の書は、復た大醫王叔和を経て、遺方を撰次す。又唐の開寶中に、節度使、高繼沖、編集上進す。二公の心を操り、智を用ひ、自ら心意を出し、其法術を廣め、舊説も亦取る可きは取て、其間に雜ると雖も、或は仲景の本意を失ふて、未だ古聖の經に符合せざる有り。愈々後人をして、學び難からしむ、況んや、仲景時代の四升は唐宋の一升にして、其四兩は唐宋の一兩なり（支那は革命毎に殆んど度量衡を改め來れり、是の故に諸家方書の分量其實際の量を知ること容易ならず。其概數は拙著和漢醫方の序例に記す）是を以て今仲景法を用ること甚だ不便なり。近世朱奉議其意を得て、活人書二十卷を作り、後學をして施行し易からしむ、其間亦聖人の意に會はざる者往々有る也。是れ陰陽變化の道を知らざるに因れり、「醫の妙用三墳に在り、聖人に非ずんば孰れか其意を明らめん」次に二萬餘年後、周

の文王（周の文王の易）に至て始て象を立て、卦を演べ、而して周公爻を述ぶ、其後、五百餘年にして孔子（孔子の易）以て十翼を作りて、易書完し、易教は五行八卦を體にし、儒教（儒教）は三綱五常を存し、醫教（醫教）は五運六氣を要と爲す（五運は五行也六氣は太陽、陽明、少陽、太陰、少陰厥陰也）教門三つなれども其道一也。故に經に曰「五運陰陽なる者は天地の道也。萬物の綱紀、變化の父母、生殺の本始、神明の府也。通ぜざる可からず」と又仙經に曰「大道は籌算す可からず。何んとなれば道は數にあらざれば也」と籌算す可き者は天地の數也（佛書の信心録に曰「一即一切、一念萬年、十方も目前、極小も同大、極大も同小」と例へば彼の電氣を觀よ、十方の電光即時に目前に現はる又電球の大小に隨て忽ち大に忽ち小となる。又人の一念天地鬼神を動すも、此の理に由る也。是れ道は數にあらざる證也）天地の數（天地は物體なり故に天地の數は即ち物の數也）を得ば、大道其中に在り。三部九侯論に曰「天地の至數は一に始て、九に終ふ、之を數へて十にす可く、之を推して百にす可く、之を數へて千にす可く、之を推して萬にす可し。萬の數勝て數ふ可からず然れども其要は一也（要一は太極を指し、二より九までは陰陽の千變萬化を云ふ、若し九に止めずして、十に到れば、變化の道を失ふ、此れ俗の數學に於ても人の知る所なり。故に盈れば必ず虧くるは月潮を觀ても知る可し。故に人の世に居る謙虛の徳を尙ふ也）又經に曰「其要を知る者は一言にして終る。其要を知らざる者は流散して窮り無し」と（言ふは陰陽太極の變化窮り無く盛衰興亡の常ならざるを知る者は其太極たる中心を持して之を失はざるが故に、萬邊に處して危からず。之を知らざる者は、中心を失ふて忽ち

顛覆す）又經に曰「至數の機は、迫近して微なり。其來る見る可し。其往く追ふ可し。之を敬する者は昌へ、之を慢する者は亡ぶ（是れ治療上最も大切なる注意なり。國家に於ても現今の如く凶兆の到るを見ては最も警戒反省せざる可からず）無道にして私を行へば必ず天の殃を得る。又經に曰「治、天の紀、地の理に法らざれば、災害至る。又曰年の加る所、氣の興衰、虛實の起る所を知らざれば、醫と爲す可からず。故に醫師たる者は陰陽の虛實を別つを以て、最も樞要と爲す。又病を識るの法は、其病氣を五運六氣の他に歸して見る可し。故に本書を作り名て素問玄機原病式と云ふ、未だ備さに諸病を論ぜずと雖も、此を以て之を推さば則ち病の六氣陰陽の虛實を識るに幾からん、蓋し運氣の象を求めて其自然神妙の情理を得可し。

〔素問玄機原病式〕の例（前文の續き）

○五運の主病

- 諸風病及掉眩の病は皆肝木に屬す（肝臟は五行に於ては木也）
- 諸痛痒及び瘡瘍の病は皆心火に屬す（心臟は五行に於て火也）
- 諸濕病及び腫滿は皆脾土に屬す（脾臟は五行に於て土也）
- 諸氣病、臌鬱病、痿病は皆肺金に屬す（臌は滿也蓋し肉腫、鬱は奔迫、蓋し氣滯、肺は五行に於て金也）

○諸寒病、收引病は皆腎水に屬す（收は斂也寒に屬す腎は五行に於て水也）

○六氣の爲病（前文の續き）

○諸暴病（俄然起る病）強直病、痙戾病（痙は縮也戾は乖戾）裏急病（大便出んとして出でず痢病に多し）筋縮病は皆風に屬す（足の厥陰風木の病即ち肝膽の氣病）

○諸病の喘嘔吐酸病、暴注病（水射）下迫（前の裏急後重と同じ）轉筋病、小便渾濁病、腹大にして鼓の如し（脹滿）癰疽（毒瘡）瘍疹（瘍は頭瘡也、疹は粟の如き小瘡皮上又は皮内に生ず）瘡氣、結核（肺結核に異なり處處に核の如く結聚す）吐下、霍亂（今のコレラ）昏鬱（昏悶也目くらみもだゆ）腫脹、鼻塞り、鼻衄（鼻に涕を流し或は鼻血、血汗等）血溢（口鼻等出血）血泄（下血）淋閉、身熱、惡寒、戰慄、驚惑、悲病、笑病、膽妄（妄語）蜈蚣（鼻血其他血汚）は皆熱に屬す（手の少陰經君火の熱、心臟小腸の氣也）

○諸瘧病（柔瘧、剛瘧の二種あり強直にして柔和ならず婦人の瘧病あり、破傷風あり一名瘧病金匱要略に詳）強直、積飲（留飲）痞隔、中滿、霍亂、吐下、體重、附腫肉泥の如く之を按せども起らず是皆濕に屬す（足の太陰濕土乃ち脾胃の氣也）

○諸熱病、昏愾（昏眼、身動）暴瘡、冒昧、躁擾、狂越、罵詈、驚駭、附腫、痿癱、氣逆、衝上、禁慄して神守を喪ふ如き病、噎、嘔病、瘡瘍、喉痺（喉閉）耳鳴及聾、嘔涌、溢食不下（今の癌）目

不明、暴注、瞶瘵（目動き身引き動く）暴病、暴死は皆火に屬す（手の少陽相火の熱、心包絡三焦の氣也）

○諸澁病、枯涸、乾勁、絞揭（皮膚開き裂く）は皆燥に屬す（手の陽明經燥金、肺太陽の氣也）

○諸病の上下に出る所の水液、清冷、澄徹、癢癢（腹の結塊）癰瘤、堅痞、腹滿、急痛、下痢清白、食し已て飢へず。吐利腥穢（吐下の物臭汚）屈伸不便、厥逆（足下より熱氣或は寒氣攻め上る）禁固（身体固く不便也）是れ皆寒に屬す（足の太陽經の寒水、腎と膀胱の氣也）

以下の詳論は之を略す、小篇の載する能はざる所也」凡そ此等皆陰陽太極の理に基て其病原を明にし以て診察を爲し又鍼灸藥治の方を定む」然るに西洋流の醫學は何等病原を知るの方なく、一に微菌を以て病因と爲す。而も其微菌の生ずる元は、濕熱にして其濕熱は病患の爲めに、氣血の鬱滯より生ずるの者たるを知らず。却て病の副産物を捕へ來りて病原となす。誠に顛倒笑ふに堪へたり、此のことは後章之を審明にす。其治の無効なるは當然也。

○素問入式運氣論の序に曰夫れ醫書は乃ち三墳の經也。伏羲、天文を觀て甲曆を造り、神農百草を嘗て本草を制し、黃帝疾苦を論じて素問を成す。因て知る其道奧妙にして窮研し易からず。心を留め意を刻むに非らざるよりは、豈に其玄機に達せんや。思ふに天地の氣運、最も病の補瀉に要あり」と現代の醫師及衛生家天候氣運の病原に關するを知らずして、人の病を治めんと欲す、何ぞ其思はざるの甚しき也。古人は毎年の天候を豫知し、前以て其年中に起る可き病患を知るを以て、所謂未病の治を爲

し得る也。

○醫學正傳序文の要に曰夫れ醫の道は、民命の繫る所、其責任重し、或は儒術を経ずして、偏門（今の専門也）是れ實に偏門にして片輪也を擅にして、正道を知らず。是れ刃を以て人を殺すに幾し、是を以て神農本草を制し、黃帝岐伯素問を著し、扁鵲難經を作る、皆天地人身陰陽の理を發明する所以にして卓立して、萬世醫家の祖と爲る。（専門の弊第五章にも論あり）我素難に於て苦志鑽研せざる無し、然れども義理玄微にして四紀（四十八年）を経て始て聊か得る所あり。今七十八、精力日に衰ふ毎に藏む、世醫、多く偏門を踏みて、民命を天折する者少からず。是を以て荒拙を揣らずして此の書を成し、以て偏門人を殺すの害を防ぐ」と我八十二歳にして此の篇を編む者これ全く之に同じ、而も現代の醫弊は上記の時に比すれば、天地の差あり。嗚呼悲哉、諸君我が今編む所の書は皆古典の良なり。宜しく皆之を讀む可し。故に先づ其序を掲げて其概要を知らしめたり。

○醫方大成の序の要に曰醫家蓄ふる所の方書多しと雖も、用ゆ可き者寡し、此の書は諸方中の有効なる者を集む、因て醫方大成と名く萬里の行にも携へ易し。

○傷寒論の緒言の要に曰余毎に越人の齊侯の色を望疹せしを見て、其方を慨歎せずんばあらず。怪む所は當今の士曾て神を醫藥に留め以て、君親の疾を療し、貧賤の厄を救ひ、以て其身を保ち其生を養はず。只だ榮勢を競ひ、權豪を企て、名利是れ務めて、其末を飾り、其本を棄て、其外を華にして、其内を悴す。卒然邪風に遭ひ非常の疾に墜りて、震慄して、志を降し節を屈して巫祝を欽望し、凡醫に委して其處置に任せ、其身斃れ神明滅じて、變して異物と爲り、重泉に潛み、徒らに啼泣す痛ひ哉（

現代の貴顯宜しく思ふ可し）

世學て昏迷して悟らず。是の如き輕き生命ならば、先きに競ひし所の榮勢は何の爲めなりしや。進んでは人を愛すること能はず。退ひては身を保つこと能はず。蒙々昧々として愚なること遊魂の如し、哀ひ哉。

趨世の士浮華と馳競し、根本を固ふせず。軀を忘れて物に拘ふ、危きこと氷谷の如し、余の宗族二百餘、未だ十年ならざるに死する者三分の二也。因て素問難經等を撰用して、傷寒雜病論を造る。未だ盡く諸病を癒す能はずと雖も、庶くは以て病を見て源を知る可し（素靈の偽作にあらざる明證也）

夫れ天五行を布て、萬類を運す、人は五常を稟けて五臟を有つ、經絡、府俞、陰陽會通し、玄寅幽微にして、變化極め難し、才高く識妙なるにあらざるよりは、豈に能く其理致を擇り得んや（現代醫家の振はざる全く茲に在り）

上古に神農、黃帝、岐伯、伯高、雷公、少師、仲文有り。中世に長桑、扁鵲有り。漢に公乘、陽慶、倉公有り。此れより後は未だ聞かざる也。今の醫を觀るに、經旨を思ひて以て其知る所を演ることを念はず。名家技を承けて終始其舊を墨守す。而て病を省み疾を問ふに辨佞を以てす。

其治や病者と相對すること少時にして便ち湯藥を處し、寸脈を按するのみにして、尺脈に及ばず。手を握て足に及ばず。

人迎脈と趺陽脈と手の脈の三部を養へ考へず。動數發息五十に滿たず。短期未だ診を決することを知

らず（靈樞根結論に曰一日一夜に五十營して以て五藏皆氣を受く、四十營は一藏に氣無し十營に満たずして一代する者は五藏に氣無し之に短期と與ふ短期は死期也）九候會て鬚髯無く、明堂、闕庭盡く見察せず（闕は眉間也庭は顔也）所謂管見のみ、夫れ死を視、生を別つこと實に難し、孔子曰生れながらにして之を知る者は上也學之れに亞ぐ、多聞博識は知の次也と余宿より方術を尙ぶ、請ふ斯の語を事とせん」現代の醫家之を何とか見る卿等の學の淺近を省みよ

○金匱要略心典の序の要に曰要略は張仲景の著す所、雜病を治する祖法也。其方たる約にして、驗多し其文簡にして通じ難し、故に務めて吾が心を以て、古人の心を求めて、此の書を作り名て金匱要略心典と云ふ」と是れ醫の意たる所以にして佛々祖々の以心傳心と同じ之を「心に得て之を手に應ずと云ふ、現代醫の如く、心に得る所無き者如何んぞ、手に應じて書を著はし、病を診し、治を施すを得んや。今の博士達黃疸の症を知らず。之を肝膽の疾と爲す。其意患者の發黃を見て膽汁の漏洩を爲せしならむ驚く可し。又或る醫人糖尿を病む、即ち腎消の疾なり。大學病院に入る、我が親族なり。其療法を質せば則ち云ふ、米粒を絶ちて肉食すと、我其不可なるを諫む、彼頑として應ぜず。是の如きは毒を服して病を養ふ者、後ち遂に瘡を發して死す」其瘡や此の病につき物也。漢方に於ては此の病にかゝれば、先づ以て瘡藥を調へ置くを例とす。然るに當今の醫は其瘡を偶發の者と思へり、萬事か此の類なる可し悲哉素養なし。

○金匱要略第一に曰上醫の未病を治（末病の治）すること如何ん、師曰肝の病と知れば、肝は病を脾に傳ふることを知るが故に、先づ脾を充實にす（是れ木は土を尅する故なり）然れども四季は脾土旺す（四季の土用は土氣盛なるを云ふ）故に充實を用ひずしてよろし、唯だ其肝病を治る也（面色蒼は肝病面色蒼黃は肝病既に脾に入る）夫れ肝病は補藥としては酸味の品を用ひ助くるに焦苦（火の味）の味を用ひ、益するに甘味を用て之を調ふ（甘は脾の味）酸味は肝臓に入り焦苦は心臓に入り甘は脾臓に入る○脾土は能く腎を傷る。腎氣微弱なれば水行かず。水行かざれば心火盛なり。心火盛なれば則ち肺を傷る（今の肺結核是れ也。現代の醫之を知らず故に千治萬療無効也）肺傷れば則ち肺金の氣行かず。故に肝氣盛なり（現に肺病者の肝積強きは此の爲めなり）故に脾を充實し置かざる可からず。充實し置けば肝病癒ゆ此れ肝を治するに、脾を補ふ所以の要妙也。經に曰不足を補ひ、有餘を損すと是れ也。餘の四臟の治も此の理に準ず。

編者曰是れ五行の理を知らざる可からざる所以也。然るに當今の醫流之を閑却す故に千治萬療、更に其効無し、今醫は鑛物を掘るに鑛脉に由らずして濫掘するが如し、動物試験の愚は第四章微菌論下を見る可し。

又曰人は風氣を稟けて生長す、萬物も亦然り、然れとも風氣亦能く之を害す、恰も水能く舟を浮ぶれども、亦能く舟を覆すが如し、若し五臟の元眞通暢なれば其人安和なれども、客氣（外來の風氣）人に中れば多く死歿す、千般の病難三條（諸病原三條）を越へず。一は經絡の受邪が臟腑に入て、内の所因と爲る（内科の病）二は四肢、九竅、血脉の相傳が壅塞不通して外、皮膚の所中と爲る（外科の病）

四〇
三は房室、金双、蟲獸の所傷なり。此を以て之を詳にすれば病由(病原)却て盡く。若し人能く養ひ慎て、邪風に經絡を干さしめざれば、經絡適申す、經絡未だ臟腑に流傳せざれば、即ち醫之を治む。四肢僅に重滯を覺へば即ち導引、吐納(深呼吸)鍼灸、膏摩して、九竅をして閉塞せしむること勿れ。更に能く王法即ち國法を犯すこと勿れ。禽獸の突傷、房室以て精氣を竭乏せしむること勿れ。服食は其冷熱、苦酸辛甘を節し、形體に衰病を遺さされ云々

編者曰仲景の法たる病原も病治も眞に明白なること、是の如し、之に反して現代は病原も治方も甚だ不明不良なり次の甲乙經序下に之を證明す。

○甲乙經の序の要に曰素問靈樞の内經を以て或者は黃帝の書に非らず。戰國に出るに似たりと云ふも、億度無稽の論にして辨するに足らざる也。又醫を以て小道を爲す者あり。是れ豈に大智明眼の人ならんや、坡僂(東坡居士乎)が楞伽經の跋に曰「經の難經有る句句皆理なり。字字皆法なり」と豈に知らんや難經は内經より出で、僅かに其十が一なることを、難經すら右の如し内經知る可き也。夫れ内經の民命を生ずる。豈に十三經の民心を啓くに劣らんや、故に玄晏先生曰人にして醫事を知らざるは遊魂のみと、忠孝の心慈惠の性有りと雖も、君父の危困赤子の塗地を濟ふこと能はざるを慮り、聖賢精思極論して其理を窮盡せられし也。故に儒者其心を此の書に盡きざる可からず(儒者は當今の諸學者一般と見る可し)又奈何ぞ醫を業とする者、靈素を置て聞かず、性命の玄要に味くして治を誤り人に天殃を遺さざらんや。

○類經圖翼の自序の要に曰夫れ生は天地の大徳也。醫は天地の生を贊る者也。人の兩間に參るは惟だ生のみ、故に聖人天地生を好む心を體して道を開く、誠に仁孝の大端、養生の首務にして、達人の廢す可からざる者也。惟だ其理幽遠にして究め難し、其蘊に徹せんと欲せば天人(天理人道)を悉す可し。人の生有る、天の命なり天の育なり。人最も靈也。故に造化なる者は天地の道にして、斡旋する者は聖人也。消長する者は陰陽の機にして、燮理(燮是和也)は明哲の事也。天功を補はんと欲せば醫を最とす。死生は掌を反す、千里の謬りは毫釐に係る。故に精微の思あらざれば、隱を察するに足らず。果敢の勇あらざれば以て天を回すに足らず。圓融の智あらざれば以て變に通するに足らず。堅持の守あらざれば以て萬全するに足らず(一旦病原を診し得れば飽迄も其方の治を續けて止めざるが如きは是れ也)凡そ此の四者其一を缺く可からず。必ず之を備へんと欲すれば、惟だ理を窮め物に接し知を致すあつて、以て聖人の心を求む可し。然して心法の傳は、止だ内經の一書に頼る(内經は素靈)苟も之を舍て醫を言はんと欲せば、方書(藥方書)を求め糟粕を求めて以て僥倖を圖るに過ぎず。皆苟且の流のみ、醫にして苟且ならば、其害勝て言ふ可からず。故に扁鵲、靈素の精要を採て八十一難を設け爲して、來學を開けり故に余之に倣ひ類註並に圖翼、附翼を作る云々

○十四經發揮の序文は四あり。當今鍼灸流行學ぶ者多し、因て其四序中の要を抄出和解すること左の如し。

第一序の要に曰本書は十四經絡を發揮する也。經絡の人身に在る手の三陰三陽と、足の三陰三陽にて

十二經脈也。之に任脈と督脈を加へて十四經也。任脈は腹に直行し、督脈は背に直行す、腹背の中
 行諸穴也○手の太陰肺經は左右各十一穴○足の太陰脾經は左右各二十一穴○手の陽明大腸經は左右
 各二十穴○足の陽明胃經は左右各四十五穴○手の少陰心經は左右各九穴○足の少陰腎經は左右各二
 十七穴○手の太陽小腸經は左右各十九穴○足の太陽膀胱經は左右各六十三穴○手の厥陰心包經は左
 右各九穴○足の厥陰肝經は左右各十三穴○手の少陽三焦經は左右各二十三穴○足の少陽膽經は左右
 各四十三穴○任脈は二十四穴○督脈は二十七穴にして人身を周回せり、此を明めて鍼灸藥を用ゆれ
 ば、効驗あらざる無し、夫れ醫の病を治る、人の水を治るが如し、水の天地に行くは猶ほ血氣の人
 身を行くが如し、塞るも溢るも病を爲す、故に迎隨補瀉、汗下、宣導して、其平和を取る可し」と
 醫の道は止た是の補瀉平和のみ。

第二序の要に曰十二經は左右の手足にありて、各々陰と陽とに別つ、陽は順に布き、陰は逆に行く也
 三陽は太陽經と少陽經と陽明經也。陽明とは兩陽合明の義を以て名づく、三陰は太陰經と少陰經と
 厥陰經也。厥陰とは、兩陰交も盡くとの義を以て名づく」又孫絡なる者有り。孫絡の數は三百六十
 五なり。經脈に附て行き、周流して息まざる者也。又陰維脈、陽維脈、陰蹻脈、陽蹻脈、衝脈、帶
 脈の六脈(奇經六脈)有り皆繫屬する所有り(編者曰陽蹻脈の繫屬する所は左右二十二にして申脈
 僕參、附陽是が足の太陽經の穴也」居膠是れ足の少陽經章門下の穴也」臑兪、是れ手の太陽經にし
 て足の太陽維脈と同じ地に會す」肩髃是れ手の陽明經にして足の少陽と同じ會す」巨骨是れ手の陽

明經の穴也」地倉是れ足の陽明經にして手の陽明及び任脈と同じ會す」巨膠是れ足の陽明經の穴也
 「承泣是れ足の陽明經にして任脈と同じ會す」晴明是れ足の太陽經にして手の太陽、足の陽明、陰
 蹻と五脈相會す」都合二十二穴也○陰蹻脈の繫屬する所は八にして然骨、交信、晴明、也經脈及他
 の會脈略す○陽維脈の繫屬する所は三十二にして金門、陽交、臂臑、臑兪、天膠、肩井、瘰癧門、風
 府、風池、腦空、承靈、正營、目窗、臨泣、陽白、本神也○陰維脈の繫屬する所は十二にして築
 賓、府舍、大橫、腹哀、期門、天突、廉泉也○衝脈の繫屬する所は二十四にして氣衝、橫骨以上幽
 門に至るまで左右二十二穴は皆少陰腎經にして臍を挟む各五分也○帶脈の繫屬する所は四にして章
 門、帶脈、五樞、維道也)而て督脈、任脈の二經(督任二脈)は腹と背を包みて專穴有り。諸經の
 滿て溢るゝ者を受く(難經曰奇經八脈(奇經八脈の効用)は聖人の溝渠を圖り設けて水道を通利して
 洪水にて溝渠の滿溢に備へたるが如しと)學ぶ者常經に非らずと云ふて之を忽せにす可からず。宜
 しく諸經脈と並び論す可し其諸經脈の隧穴六百五十七を通考して、治を施せば則ち醫の神祕盡く、
 蓋し古聖人の至靈を以て洞視して定る所なり。故に能く系脈の眞を審にし、虛實の變を原ね、名號
 を立て、人をして識得して病を治めしむ、後世に至り、數々解剖して幽を索め、隠れたるを擇りし
 も、其範圍を越ること能はず。聖功の再ひす可からざること一に茲に至る。之に由て之を觀れば醫
 道を學ぶ者は經絡を明めざる可からず。經絡を明めずして、疾病を治めんと欲するも、其能はざる
 こと明かなり。此の書は内經骨空論及び靈樞本輸篇に本づきて作れり、若し諸經書を明めずして誤

治せば、是れ鋒刃を用ひずして人を賊する也。

第三序の要に曰経脈を明めざれば、何ぞ營衛（氣血の道）を知らん、此れ内經靈樞の由て作る所也。經脈十二は以て地の經水に應じ、孫絡三百六十五は以て周天の度に應じ、氣穴は以て一歳の日に應ず營氣の人身を營る晝夜に環周して、天旋の四十九度を軼ぐ、或曰衛氣は其經に循はずと（衛氣篇に曰其浮氣の經に循はざる者を衛氣と爲す。精氣の經に行く者を營氣と爲す）晝は諸陽を行き、夜は諸陰を行くの異あり。始め相従はされども、而も亦嘗て相離れざる也。夫れ日と星は殊なりと雖も、天に麗る所以の者は、皆陽輝の昭著也。河と海と殊なりと雖も、地に行く所以の者は一水の流衍也。經と絡と交り、相貫屬すと雖も、人身を周る所以の者は一の營氣也。經水道を失へば洪水起り、經脈常を失へば疾病生ず。故に鍼灸を用る者は、必ず俞穴を明にし、開閉を審にし、虚實に因て、之を補瀉す、此れ經脈本輸の主旨なり。尤も其妙を推究す可し云々。

第四序の要に曰飲食起居、微しく違へば病む、其病の起るや、五臟六腑手足の陰陽に出でず。聖智の人之を治る有り、其邪の入る者は之を出す也。上古病を治るに湯液醪醴を用るは甚だ少く（醪は濁酒、醴は甘酒）大概鍼灸を用て治す、其後藥治の方大に行はれ、之が爲め鍼灸の道衰微して、經絡明かならず。經絡明ならざれば、邪の所在を知らず。効を取ること難し（現代改正孔穴の如き何ぞ能く邪の所在を知り擧ることを得んや）素問靈樞經の如き、經絡の始め終りを明にし、孔穴の分寸を相し（示すの意）天下の治者をして、天下の病を視て、其七情六淫（七情は喜怒哀樂懼憂欲也。六

淫は風雨寒暑濕燥也）の由來する所を究め、及び其病は某經の陷下也。某病は某經の虚若くは實と爲して補法又は瀉法を行ひ、某病は某經の表若くは裏と爲して汗下を行はしむ、鍼灸藥餌之を用て可ならざる者無し云々」現代の醫家及衛生の當局者素問靈樞の法を用ひずして何を以て陷下、虚實、補瀉、表裏、汗吐下を行はんとするか肺炎すら治し得ざるに非らずや。

○千金方論診候中に曰診察の法は平且を以てす、陰氣未だ動かす。陽氣未だ散せず。飲食未だ進めず。經脈未だ盛ならず。絡脈調均し氣血未だ亂れず。精しく其脈を取り其逆順を知るは其時なり」上醫は國を醫し、中醫は人を醫し、下醫は病を醫す」と（現代は皆醫する能はず）又上醫は未病を醫し中醫は病まんする者を醫し下醫は已病を醫す」と脈の三部は寸關尺也。上部を肺と爲し中部を脾と爲し下部を腎と爲す」九候は部に各々三有り合て九候と爲す（上部）は兩額の動脈なり頭角の氣を主る。兩頰の動脈は口齒の氣を主る。耳前の動脈は耳目の氣を主る（中部）は手の太陰肺の氣也。手の陽明胸中の氣也。手の少陰心の氣也（下部）は足の厥陰肝の氣也。足の少陰腎の氣也。足の太陰脾の氣也。以上を九候と爲す云々」地水火風和合して人と成る故に人の火氣不調なれば全身蒸熱す、風氣不調なれば全身疆直し諸毛孔閉塞す、水氣不調なれば身體浮腫し氣滿ち喘粗す、土氣（脾氣）不調なれば四肢擧らず。言に音聲無し、又火去れば身冷へ、風止めば氣絶へ、水竭れば血無く、土散すれば身裂く、然れども愚醫脈道を思はずして其病を反治すれば、臟中の五行をして相尅せしめ、火熾に油を加ふ、慎まざる可からず。凡そ地水火風の四氣徳を合すれば四神安和なり。一氣不調なれば一百一病生ず。

四神動作すれば、四百四病(四百四病及癒否)同時に發す、又曰一百一病は治せずして自ら癒、一百一病は治して癒やす可し。一百一病は治すとも癒へ難し、一百一病は、死す治めされ」現代之を知らず死に臨みて注射し、病者をして徒らに苦ましむ此の事第五章にも論あり。

第四章 現代西洋醫學批判

我等は現代西洋醫學を批評するに先ち、無醫、無藥の天然自治を同胞に勸告す。右に就ては次の第一節を見る可し、尙ほ諸動物の無醫健康を思ふ可し。

第一節 天然自治

○古賢、斑固曰病有て治せざれば常に中醫を得る」と古の上醫は病者の九割を治し、中醫は七割を治し、下醫は六割を治すと經文に見ゆ。「今病有て治せざれば中醫を得る」とは病の七割迄は醫者にかゝらざれば自然に癒るとの意なり○又第三章の終り千金方にも「四百四病中一百一病は治せずして自愈し、一百一病は死す治す可からず。一百一病は癒へ難し、一百一病は治す可しとあり。之に由て之を觀るも現代西洋醫術にては自治の方優れり、何んとなれば西洋の醫聖「ヒポクラテス」すら醫は自然の僕なりと云ひ。又「ガーレン」も自然は醫師なりと云ひ「田中氏病理總論に曰醫療は方便に過ぎず、病の治癒は自然なり。醫は之を輔佐するのみ」と云ひ。丘博士は「病を癒すは自然であつて御禮を貰ふ

は醫者なりと」云ひ。西洋醫家長尾氏は第五章に於て「吾等は醫は自然の僕と思へり。今の醫學者は自然に不忠實なり驚かざるを得ず」と云へり。更に之を古人に見れば、白隱禪は斑固の黨で「中醫は益も無く損も無し、下醫は招かざるを賢とす」と云ひ。古大醫戴人は曰若し小兒の病は庸醫を用ひざるに如かず、妻妾の怪むを恐れれば、湯に蒸餅を浸し丸じて白丸と作し、欺て眞藥と爲し之を服せしめて、其自然の治と爲せ之を最上藥と爲す。嗚呼斑固は眞の良史なり。「病有て治せざれば中醫を得る」と云へり。暴に得る大疾病を除く外は、當に謹て陰陽を和し、衆と謀ること無る可し。若し未病の前は余が奉養の法に従へば病生せず。縦ひ微病あるも服藥せずして可也」と益軒先生曰其器量無くば醫者と爲る可からず。人を害し己を損す」と實に醫は人命の係る所なり。庸醫は一生を通じて暗々裡に人を殺す幾百千人なるや知る可からず。故に獨嘯菴曰醫者の暗々裡に人を殺す之を劫盜の人を殺傷に比すれば更に夥し」と其因果の惡報如何ぞや、眞に畏る可し。是れ益軒先生の所謂人を害し己を損する者也。而て此の理は之を醫政を掌る官人の身上に推さざるを得ず。即ち醫者一人にして暗々裡に人を殺す幾百千人ならば、醫政を掌る當局者の怠慢乃至醫道の失墜は其責任及因果の惡報殆んど測定す可からず。故に醫政を掌る官人並に醫者たる者は第一章以下に述る如く仁慈救済を誓願して始めて之に従事す可し。否らざれば必ず惡報を子々孫々に及ぼす可し。

若し是の如き誓願を爲し天に代て民を養ふ大志無く學德兼備の人無くんば、上文斑固の説の如く天然自治に任す可し。區々たる官祿や、不淨なる巨萬の財を得たりとも、未來永劫の惡因果惡に比すれば

物の數ならず。
終に臨て一言す老子五十章に曰「人の多く死するは餘りに生を欲する厚き故なり」と富貴の人の多く死するが如きは即ち醫藥を濫用するが爲めなり。尙ほ諸動物の無醫健康に顧みよ。

第二節 現代醫の無力

○前節に言へる如く西洋醫術は到底自然治に及ばぬのである。然るに世人は之を知らずして、今の西洋醫術は如何にも尊き者だと過信し、入學して千辛萬苦の業を積み、學士博士の稱號を得て、欣然として校門を出で、其修得したる所の藝術を實地に行ふに至りて、意外千萬の感に打たれ、廢業する者もあれば、枇杷の葉療治に轉せんとせし事實もあり。或は正眞なる醫者は患者に向て藥は無ひ、水を服せよと云ひ聞すもあり。尙ほ第三節中にも云ふ如く、日本藥局方中六百に近き藥の中内服藥は重曹と「モルヒネ」以外に用達する品は無きに似たるなり。右に就ては長尾醫師は第五章に於て左の如く云へり。
學校を出でて開業し實地に治療を試る所の新醫家よ卿等が其始め醫に志す時の希望は廣大にして、醫學は如何に尊き者かと思惟せしならむ。然るに實地に之を應ずるに至りては、案外眞効果の薄弱を悟りしならむ。是れ當然に起る感想なり」と。
○土田博士曰澤山な病氣中で治方の知れて居る者は三つか四つかで其他は鼻風ですら病原は知れて居らぬ」と其三四も怪し。

○寺田醫學士曰實際に藥を用て癒る病は僅かに急症「リウマチス」「マラリヤ」「チブテリヤ」梅毒位の者で其他の病が藥で癒ると思ふは大間違だ」と其梅毒治の如き決して眞癒にあらず、副作用を伴ふ其他も怪し。

○編者曰嘗に病原不明のみならず、病原が間違て居る。微菌病原論の間違は後ちに大に論ずるから茲に之を云はざるも、黄疽病は元來脾病なるを膽病と誤りて居る。又痛風と「リウマチス」は同病であるを、異疾と爲して居る。又神経痛、痛風「リウマチス」は皆同一なる寒濕風の雜至を病原とし、病む時と寒濕風分量の多少に因て種々の症候を呈する者なるを知らずして、他病と爲せり。是の如きは其一例に止る。其他推知可すし。寒濕風雜至は素問十二卷痺論に詳なり。

第三節 化學藥の無効

○帝國大學教授藥學博士朝比奈泰彦君の全國醫師會に於る(洋藥の無効)講演を菅草會誌に見る。其要に曰臨床家が現今一般に使用し居る内服藥に就ては其効力を確信して居るか何うかは、甚だ疑問である多くは只習慣的に使用し居るのであるまいか。日本藥局方中六百に近き普通藥が如何ほど其効力が信認せられて居るか。或人は「内服藥は重曹と「モルヒネ」の二品だけあれば、十分と言ふて居る」(他は無効の意ならむ)此の點に關し漢方醫流の態度は全く反對で、一品一物も其効を確信して居るや

うである。又元來藥品の發見は歐洲人では無い。歐洲の山林は「モミ」「ツカ」「フナ」で原野は牧草のみ、特産の藥品は「チキタリス」と「ゲンチアナ」位の者であらう。自然人（非科學者）天賦の能力（神農等を指すならん）が熱帶亞熱帶の豊富なる植物中から、撰擇した結果を云ふならば南米に於ては「キナ」の發見と爲り、蒙古に於ては大黃を知り、小亞細亞に於ては阿片を見出し（編者曰此等皆本草に載す支那に産す）支那に於ては神農以來本草綱目に擧げた千八百種の藥品と爲れり」西洋醫流の採用と共に盲目的に西洋崇拜の結果彼等の製品でなければ、効力ない者のやうに、信ぜられしも何ぞ知らん。前記の如く効力顯著の藥品は自然人の發見である。歐人は之を變形して科學語を以て説明せしも、東洋に於て千年以上（數萬年）經驗した藥品を土塊視するは無謀と云ふか、迷信と云ふか。是の如き誤見は打破せなければならぬ。又十九世紀以來藥品から單一の成分を抽出して單味の化學品と爲したれども、先の單味主義は決して完全の者で無い。第一藥理的試驗が殆んど健康なる生體に對して行れたること（病人に試みず）第二應用した藥品の運命に就て不明の者多き事である。其結果は角を撓て牛を殺す弊は無いであらうか（編者友聞す傳染病者避病院に於て當始牛殺の行はれし事を又長尾氏著「噫醫弊」九十二頁以下に學用患者の語あり、眞に動物同様取扱はれし旨を詳記せり下文に之を擧ぐ可し。嗚呼悲惨なる哉）第三化學的操作は動植物の成分を分離抽出するに完全の方法無き事である。即ち現在の抽出方は不完全にして一の生藥（草根木皮）から其抽出した物質は、生藥の性質と異なる結果を生ずるのである（酒を蒸發すればアルコールと爲り苛烈無味となる）如何に近世の化學を以てしても、亦藥理學的試驗を以てしても、生藥の全部を代表することは出來無いと云ふ事實

は近來多くの人の注目する所と爲つた（化學など不自然の者に効の有る可き筈は無い。彼等は自然を以て醫と唱へながら、不自然なる化學を用るは抑も何の理ぞ）而も漢方に於ては多數の藥品を混和し使用して居る。予は漢方調劑の方針は西洋の單味主義より大に意義ありと思ふ（編者曰漢方は多きは六七十味を加合す。此の加合藥には其性質相忌み、相惡み、相反する者もある。然るに之を能く用る者は神醫で、五味五行の理に精通せし者でなくては出來ぬ。之を知らぬから、洋人には加合は到底出來ぬ藝當であるから、單味主義を立たせざらう。而も其効力に至りては「アルコール」と銘酒との相違である。諸君飲みくらべて何れが身心に適するや知る可きである。又單味の鹽と味噌醬油の加合品と孰れが諸君の嗜好に適するや、一は自然物を殺して用ひ。一は自然物に自然物を増し其力を加へて用ゆ。自然人に自然物を加へ用ゆ。是れ造化に一步を加へたる神聖の道也。前記自然は中醫に價するけれども、上醫は其上に出る効を奏すると同一理なり。又前記聖人は天地を支配し陰陽を調和し得るの理に基く、是を以て漢方の調劑は凡愚の爲し得ざる所也。次に歐人は自己の體素より劣る草根木皮の素質を更に抽き去て之を用ゆ。何ぞ思はざるの甚きや。

第四節 手術即刀療の不結果及慘忍

○田中祐吉氏病理總論に曰腫臓は之を摘除すれば糖米病を發す」甲狀線全部を摘除すれば惡液狀態を來し、全身發育の障碍を來す」癩痕の發生部に於て再生力を有する特殊の組織存在する時は其癩痕中に

は之に應じて組織の新生を見る可し。但し其新生せる組織は爾後唯だ其一部分のみ官能を営むに過ぎず。一般に結締織及被蓋上皮に屬せざる組織の局所的再生は、官能的意義を有する者に非らず云々」心臟筋に至りては全く再生せず」又胃腸潰瘍の基底上に新生せる線管の如きは粘液を生ずるのみにて特殊の消化液を分泌することなし」其他官能を營爲す可き細尿管の新生は全く之を知らず」膽管は多量に生ずることあるも多くは其價直なし」又曰創傷の肉芽形成を以て治癒したる後は、其部の組織的造構は創傷前の生理的組織と異なる所あれども之を全治と稱するも不可無きが如し。然れども病に抵抗する力往々減弱す」例へば尿道は再び淋菌の侵襲を招き易し」又創傷後の癍痕は癍腫を發生し易し。

編者曰東郷元帥三十年前淋症を病まれ刀療後薨去迄冬期常に疼痛を感ぜられしは我故あつて之を知る。又余の知人に小楠と云ふ人あり、壯年の頃狂人の爲めに刃傷を被りしが七十餘歳迄冬期には常に疼痛せり。又警官に岡田と云ふ人あり、明治十年國事犯人の爲め刃傷せられしが前同様舊痕長く疼痛せり。刀療の不良なる誠に明白也。

又曰新生せる小血管は抵抗力弱く容易に破裂出血し易し。

又曰癍痕組織は收縮す其時を経ると共に以前數多なりし新生血管の一部は消失し、又發育せざるを以て少數となり、且つ管腔は狹隘となる。淋巴管は缺如するか或は不完全となる。

又曰肝の外傷等の癍痕は新生すれども膽管の増殖のみで、肝細胞は毫も再生せず。

又曰神經の再生は筋よりも更に不完全にして、高等の神經即ち腦脊髓の再生に至りては殆んど之を證明すること能はず。

又曰肉芽の癍痕に化するや、表層の上皮細胞は再生せられ以て創傷の缺損を補充するも、癍痕は生理的組織と同一の造構を呈せず」皮膚癍痕を觀るに之を覆へる表皮細胞は再生するも皮脂腺、汗腺及び毛囊は一部分の殘存せし場合に於てのみ再生するに過ぎず。乳頭は著明ならず。神經は形成せられず癍痕内の新生血管は狹窄湮滅して、其數減少す云々」其癍痕收縮するや胃腸呼吸道の如き空洞臟器は之れが爲めに著明の形態變化を來して狹窄するを常とす。

編者曰是の如き不良の結果を知りながら外科手術を施すは何ぞや、彼には之を外にしては病を治る術無きを以て也。即ち藥治其他皆無効なること前文の如くなる故也。然らば何を苦んで漢方を用ひざるやと云ふに、洋學者は前章に述べし如く一理一物を固執して頑硬善に従ふ雅量無き故なり。余が親近中の醫人多く是れ也悲む可し。是れ東洋聖人の學を知らざる故也。

○簡明生理學に曰神經細胞は再生せず。腺は悉く再生する者に非ず。内臟神經を切斷するときは、其麻痺の爲め腹腔内の血管擴張し、爲に全身の血液は腹腔内に集り、其部の血管は充血し、他の部の貧血を來す。即ち大動脈及頭動脈の血壓を測るに血壓大に低下せり。之に依て腦内にも貧血を起すが故に往々死に陥る者なり。之に反して内臟神經を刺戟するときは、腹腔内の血管收縮する故に内臟に於て貧血を來し他部即ち四肢及腦等に於て充血す。

○山極氏病理總論曰軟骨組織の再生は不十分なり。筋纖維及神經纖維の再生も不十分なり。

○長谷川氏病理通論曰施術の爲め大出血若くは創傷熱を發して死を促す事あれば施術の可否は宜しく注意せざる可からず。又曰癌腫は切除するも通例再發し、數年内に全身貧血、皮膚汚色、羸瘦、脱力等を起して癌惡液に陥り、死するを常とす。

○黄帝素問に曰筋を斬り脉を絶つ身體舊に復して行くと雖も、津液を滋息せず。精氣耗減するが故に、傷敗結留して血氣内に結び、陽脉に薄る時は化して膿と爲り、久く腹中に積む時は、外則ち寒熱を爲す。庸醫之を治すれば數々陰陽を刺し身體解散し、四肢轉筋す死日期して待つ可し。

編者曰刀療の害は黄帝時代既に經驗せしこと本文の如し。故に漢書中未だ之を載せしを見ず。只鍼を用るのみ刀鋸を用ゆることなし。而て鍼刺と雖ども之を用るに法あり。曰春、肉を刺せば、血氣逆して上氣せしむ。春、筋を刺せば、血氣内著して腹脹せしむ。夏、脉を刺せば、血氣竭き解休せしむ。夏、肉を刺せば、血氣内却して恐れしむ云々」鍼刺すらは是の如し。況んや時を撰ばず刀刃を用て切開するおや。

○西洋醫長尾氏昭和九年再版「噫醫弊」は東京市本郷區此花町醫文學社より發行す。醫弊を痛論してあます所無し。當局者宜しく一讀して其弊を察し革新する所あれ。

其第十一項の要旨に曰今の醫學は治療方暗里也。極言すれば角を矯めて牛を殺す也。人道を離れて人を動物視する弊を避けざる可からず。仁心を離れたる醫學は、我斷して取らず、死嗅酸鼻、腐肉散

亂せる解剖室の一角血液に汚染する肉體は、慘の又慘たる者である。吾敢て非とせざるも、眞の研鑽の意に出ずして、博士論文の材料たるが如き、斷じて不可なり。若し夫れ學用治療患者と云へる貧病者に對する處置の如き、我云ふに忍びざる者あり。米國人中、解剖は人道に悖るとして禁止説を爲す者あり。吾國に於る宗教家にも之れあるなり。

病體解剖及び學用患者に對する眞相は細説を避くるも其道に従事する者、細心の注意を要す。醫者本來の性質を忘れ、動もすれば學用患者を人間視せずして殆んど動物視する行動教師間に實現せられ、學生等も自己の草紙の如く心得るに至る云々。又第十三項に曰近藤燕處の著「仰臥三年」を見るに曰醫師とは醫術を以て形を飾り、我慾を中心として、生活し。外に何等の趣味無く知識も無し。腐敗せる軟腸漢也。○病院とは一大地獄也○醫科大學とは此等下等動物の故郷也○病院とは妓樓也。唯利是れ貪る○官立病院に至りては牢獄也。病人は罪人視せらる。給費患者に至りては院長以下の所有物の如し。彼は血涙を呑みて責を免るゝに汲々たるのみ、先生方の威光は閻魔大王の如く、看護婦の横柄なる獄卒の如しと。燕處が無遠慮に罵倒せしこと紙上に躍如たり。彼病臥三年其間に書きし一種の社會に對する遺言なり云々」編者曰我兩人の婦人の執れも刀療を受けて瘦せ衰へ、顔色蒼白となり死に瀕せしを見る。彼等皆云ふ、醫師と看護婦にひどく手術をすゝめられ、開腹せしに此の有様となれりとして、落涙怨言實に見聞するに堪へざりき。是れ余が晩年醫學に志せし原因中の一なり。右の如き怨嗟痛憤の氣如何んぞ。其醫師其看護婦等に報ひ來らざらむや、嗚呼醫にして仁慈ならずば、必ず其

身其家に不幸を來す可し。益軒先生の「其器量無くして醫と爲る可からず。人を害し己れを損す」と云ひしは是れなり。又第一章千金方大醫精誠論に「治病に生物を用るを禁じ、鷄子だも容易に用ひざりし」大醫の心情を顧みよ。是の如くならば必ず天祐を得可し。尙ほ下文を見よ。

〔噫醫弊〕 緒言以下を涉獵抄記すれば左の如し。
 儒醫、僧醫等の出るに及びては醫人の心著しく向上し、達すれば良相と爲り、達せざれば良醫と爲るとの意氣ありき。徳川氏時代醫家の著書は學と藝とを兼ねて倫理を説かざる無く、醫育必ず學術と道義と並行せしむを認む。此の時代も醫弊なきに非らざりしも、社會の制裁を存し且つ矯正する人物ありき。徳川氏の中葉に於ては一國文教の中心は儒醫にして其間高邁の士を輩出せり。維新時代の如き醫家出身の者多し、前後に其類例無る可し。王政復古の業成り東校起れり、是れ我國唯一の高等醫育機關にして今の東京醫大學部なり。當時の醫育は物質的技術者養成の方針なりしは遺憾千萬也。何んとなれば之を古名醫の著書に徴するも醫科と道徳とは車の兩輪の如く、又明治五六年の頃は人心最も道義の念に富みたれば也。當時の醫界には陽明學の徒淺田宗伯の如き人もありしなり。然るにも拘はらず東京大學は外國教師を招致し、物質的技術者のみを養成せし結果は遂に今日の大弊源と爲れり。即ち學校教授の品位漸次に下落し、物欲次第に盛にして終には醫術開業試験に問題の漏洩を見、或は博士號を賣買するの弊を生じたり。一方開業試験出願者は中學程度にも及ばざる學力の者もありき。而して是等が全國四萬有餘の醫師中殆んど其三分の二を占めたり。而も今日は濟世救民の志を以て醫師たらんと欲する者あるを聞かず。却て云ふ大利益を得るを以て唯一の

目的と爲し、其甚しきに至りては大學教授にして遅く出て早く退き、僅かに講演を終るや實地の指導も爲さず、私診私治に従ひ或は所勞の名を以て休講して遠方に往診するあり。人の師表たる者にして是の如くなりしかば、古の醫風破壊し世人彼等を信ぜざるに至れり（九大學事件即ち其真相の暴露也）○又豫後（豫後）の見、大家博士に誤謬最多し、驚くに堪へたり」と編者曰是れ當然の事に屬す。病前と云はず、病中と云はず、病後と云はず、彼等元來診斷學に病理學に力なれば也。天文を知らず。陰陽五行を知らず。六淫七清の由來、及び接觸を知らず。又其接觸を和げ接觸を去る藥方乃至補瀉の方を知らず。何を以て現在及び豫後の見を立る基本を有せん哉。古人曰卿等が瀕死の時、卿等の仲間の醫者にかゝり安心して死するを得るやと○「噫醫弊」に曰東郷元帥の治療に關係せし大醫諸公に對し遺憾に堪へざりしは、興奮藥乃至「リンゲル」液の濫用である（注射の弊）此等の注射は急性病にして心臟の衰弱に用ゆ可く、元帥の如き慢性必死の末期に用るは、或る意味の肉體冒瀆である。又之を民間に無闇に用るは一種の弊風である」と個は最なる論なり。徒らに患者を苦ましむ故に、第三章の千金方に曰「一百一病は死す治めされ」と又經文に曰「死期ある者は刺す可からず」と。

第五節 微菌病原論を駁す

「噫醫弊」に曰顯微鏡と試験管に因る原因醫學は發達したれども、治療醫學は逆比例に暗黒也」と此

の見解中原因醫學を發達せりとせし、著者長尾氏の觀察は誤れり。原因が發達して其結果たる治療が暗黒なる理由は斷じて無ひ。抑も顯微鏡や微菌説の大錯誤の大錯誤なることは、第一章に於ても略ぼ述べ、又拙著肺病豫防及治療篇及び治肺大全に於て詳論せし所也。又試験管の無効は、余自身六十日間も入院して知る所、俱に空中の閣樓也。若し、夫れ此の微菌が眞の病原ならんには何故に治療醫學が依然として、暗黒なるや。肺結核の如き明治の初め迄は殆んど之れ無き病にして、明治二十五年頃より淫風と俱に盛に今日迄五六十年、日に月に益々旺盛に遂に世界一の肺病國の名を得たり。斯る長日月の間、醫者は何が故に之を治し得ざるや。又、此の病は少壯年の男女に多く、老幼者に無き故は何ぞや。此れ其の色慾手淫過度なれば、左腎の精液衰乏して右腎の相火と其平衡を失ひ、内熱獨り熾にして火炎上昇して肺金を焦枯し、腐爛の結果、濕熱を生じ、之に因て微菌を生ずる者で、決定して病原に非らず、病原は精液の缺乏なり。故に此の患者に對しては先以て男女の交接を禁す可し。第一妻妾と同居す可からず。第二看護婦ある病院に入る可からず。而て拙著肺病豫防法及治療篇に載する數種の神劑を用ひ施灸をなす可し。是の如くすれば多く死を免れ平復す。

今前記治肺大全の文を擧示す可し。是れ大正十二年雜誌日本及日本人に掲げし論文中の第二章なり。即ち左の如し。

〔治肺大全第二章微菌病原論を駁す〕現代醫學は顯微鏡の出現以來細菌學が唯一最高の地位を占め、治療も衛生も皆微菌撲滅の一途に歸して居る。然るに是れは甚しき錯誤で、微菌は斷じて病原で無

い。之を病原と爲せしは、物質一偏の學究の大過失である。由來西洋人は、眼耳鼻舌身意なる六識の外に、眞知、靈知は勿論、天理を推歩する所の陰陽五行だも知らぬから、顯微鏡を以て此上無き者と信じ、此れ以上には人智は到り得ぬ者と思料して居るから、此の大錯誤に陥りし者である。若し此の錯誤が無りしならば、眞正な治療法も發見せられ、東洋の完全なる醫道も世界に歡迎せられしならむに、此の錯誤の爲め萬事休すと云ふ状態である。其爲め世界の人類は非常なる迷惑を感じつゝある。即ち生命上の大危険は勿論、經濟上に於ても莫大なる損害である。此の故に我は不肖を顧みず敢然起て之を攻撃し、知己を後生に求め、之れが撲滅を期する者である。微菌論者は遠慮無く我が説を反駁せらる可し。是れ公益の爲め、實に希望する所である。併し我は反駁の餘地無き者と信じて居る。

先づ昨大正十一年十二月内務省頒布（内務省達を駁す）の〔國民と結核〕と題する書冊に就て辯す可し。

同書に「結核患者は日本で百二三十萬人もあり年々死亡する者十餘萬人で、而も大戰以來頗る増加しつゝある」と示してある。抑も微菌は到る所に充滿し人畜は朝夕之を呼吸しつゝあると云ふことは、西洋醫家の普く承認して異論無き所である。然るに大戰後頗る患者が増加せしとは何故であらう。我等は前章以來縷述せる通り過勞、色慾の増加と斷定する。微菌論者は何と答ふるであらう云々。同書に「結核患者は何れも血氣盛りの人で十五歳以上四十歳以下の仕事盛り働き盛り、學問盛りであ

る」と示してある。是れ何故であらう。我等は前同様過勞及び色慾手淫を其病原と断定する者である。若し微菌を病原とせば血氣盛りの者より老人、小兒が最も多く病む可き譯合である」同書に「身體の抵抗力を強くすれば結核に罹らぬ」とあるのに血氣盛りの少壯者が結核病者の多數を占むるとは咄々何等の矛盾ぞ。微菌論者は何の辭を以て之を辯解する乎。

次に犬でも猫でも鶏でも豚でも腐敗せし水を飲み、糜爛したる食を取りながら、一個半個も菌毒に犯されぬは何故であらう。其他野獸林禽も一切菌毒に罹らぬは何故であらう。殊に魚類は虎列刺菌毒が澤山だとして、輸入さへ禁ぜらるゝ者であるが、其魚自身に於ては一尾だも菌毒に斃れし者の無ひのは何故であらう。先年佐世保鎮守府に於ては生魚を鏡檢せしに夥しき微菌を認めたりとて、魚商に投棄を命ぜし實例もある。微菌論者は何の辭を以て以上數個の問題に答へるであらう乎。次に人間でも色盛りの才子才媛が此の病に罹り易くして醜男醜女には比較的少いのは何故であらう。又發狂者、失心者、乞食なきは食物を選ばずして食ふのに何故菌毒に犯されぬのであらう。又田舎は都會より、野蠻國は文明國より微菌も多き譯であるのに、田舎は都會より、野蠻國は文明國より結核患者の少きは何故であらう。又日本も明治の中葉迄は過勞的病者及勞瘁と名づくる虫的(菌にあらず十藥神書に圖畫を載す)傳屍勞瘁を除けば耳にしたること無かりし結核が、今や世界第一の肺病國と變化し來りしは何故であらう。微菌論者は以上の數問に對し何んと答辯し得る乎。又同書に「醫藥にのみ頼るな」と題して今日の醫藥は遺憾ながら、微菌に直接働いて全治せしむる特殊藥は無い。全身の抵抗力を増し

間接に治する様にするまでだ。それ故に藥をよく利用し得るも、得ないもツマリ人々の平生健康に對する心懸如何が、何よりの根本である」とある。何と云ふ情ない藥であらう。間接云々も割引せねばなるまい。是れ前章に各學者の説を表示せし如く、現代醫學に於ては醫藥は畢竟一種の方便で、自然の治癒に委するより他に手段が無いと云ふことの裏書である。其證據には何れの肺病院も今日は食養のみで、世人よりは一種の料理屋と見做されて居る。患者も亦た藥は駄目だと思ひ服藥を止て居る者が多く、而して其止めた方が結果がよいと云ふに至りては、今の醫術は果して何の役に立つ者かが問題である。醫學士山本和成の「結核の治療は如何に難きか」と題する書などを見るに、既往種々の醫療を試みしも皆失敗に終りたる結果、結局無權威に行き詰りたる者である。彼の古賀博士が一時盛に唱へし、結核の注射が無効に終りしも其一例である。斯くの如くつまらぬ醫學を以て微菌を病原なりと論ずる學者の心底が奇怪千萬である。反對論者は必ず言はん微菌の病原たることは動物試驗の結果に於て明瞭なりと、蓋し反對論者の血路は唯だ此れのみである。然るに是れ亦大誤謬である。抑も動物は人に比すれば無心の者で、感應力の強い者である。恰も小兒が催眠に罹り易いのと一般である。即ち試験に供せられし動物が、菌毒に感ずるのは動物が施術者の心力及び腕力に制せられて畏怖の念を生じ、其本心を失ふて心身に變化を來すからである。若し然らずとせば、微菌は前既に述べし如く到る處に充滿し人畜は常に之を呼吸しつゝある故に、試験の時で無い平時に於て彼れ自身に感染せねばならぬの前に述べし如く、一切の動物が一個半個も之に感染せぬのを以て見れば、施術の爲め其

心身に變化を來せし結果と見る外は無い。感應に就ては「思變すれば體殊なり」と云ふ格言がある。心は身體の主であるから、思が變すれば、體に變化を來すは當然である。例へば催眠術に於て汝は狗に成つたと暗示すれば、忽ち四つ這と爲り、狗の狀を爲すが如きである。又汝の病は平癒せりと暗示すれば其病癒る。されば動物汝はこの菌毒に感染すと暗示すれば之に感染するは當然である。彼の「コッホ」氏が微菌を發見して虎列刺病原と主張せし時に大醫「コーフェル」が反對し、其證據として自ら其微菌を呑みて病起らざりしは、心に變動を生ぜざりし明證にして、亦菌が病原でない確證である。之に反して外に一人の反對者あり、之を呑みて死せしは心に畏怖を起したからである。例へば蛇を嫌ふ婦女に繩切れを投げ付け、それ蛇だと脅かせば驚て悲鳴を擧げ其繩の當りし所は腫れ上る。又嘗て外國の醫師間で、人の死は心からと云ふ議論の末、之を實驗する爲めに死刑の宣告を受けし罪人を申受け、其眼を覆ふに布片を以てして、見ることを得ざらしめ、而て其絡脈を刺し、出血せしめて死に致す旨を申渡し、反て出血せぬ程度に、其腕を刺し其下に金盞を置いて徐々に小管より水を注ぎ恰も血の迸しり出る者の如くせしに、罪囚の顔面次第に蒼白色を呈し來り、終に死亡せりと云ふ。又會元などに澤山ある話であるが、或る寺僧は山林の事で官憲の召喚を受け事面倒と思ひしかば、捕吏の面前で坐脱した。又甲乙の二禪僧あり、甲は乙に對し汝は先師の法を得て居らぬと云ひ。乙は得て居ると云ふ争ひより、然らば其得て居る證據を示すとて、其場で坐脱したこともある。坐脱とは何等の手段無く坐して其儘死することである。無門關と云ふ書物にある如く、人の死生は、旅客が宿屋を

換るが如き者で、世人の死を見るが如く、重大な觀念は、禪家には無いからである。之を要するに死生は心の作用に外ならぬ（自殺者が水中の淺き身長に及ばぬ處で死し、自縊者が繩の切れたるに絶命し居る例もある）又經脈別論に「勇者の氣は行く故に病癒ゆ。怯者の脈は着して行かず故に病む」とある。西洋生理書にも「心感動すれば心臟の脈搏或は緩と爲り或は急と爲る」とある。是も亦右の證據である。又我等が藥物を用ひず肺患者を救ひし事例を擧んに、隣接の小野村と云ふに、徳永と云ふ農人あり重症とて夜トギする位と云ふ。行て見るに重ね薄團に寢て居た。どうあるかと病人に尋るに痰が出て熱もあると、打沈みて見へた。そこで我は痰が出ればどうあるか、風邪でも痰は出るで無いか。全體痰はどうして出来る者と思ふか。痰と云ふ者は胃が冷えるから出来る者だ。彼の嘔を見よ。嘔の下に、火が熾なれば蒸發氣が能く立ちて、中の物も能く蒸せ、水氣も溜らぬが、火力が足らぬと湯氣が抜けずして、嘔の中に水氣が溜る。夫れが痰である。人の胃は嘔で肝臟の血が火である。食事をすれば睡氣のさすのは食物を消化する爲め、頭の血が降り來り肝臟に聚るからである。夫れで心配事でも出来れば血が腦に凝り下らぬから、食欲も無く眠ることも出来ぬのである。今お前は肺患に罹りて迎も生命は無い。妻子や家の事は如何した者かと、思ひ續け前途を悲觀して居るから、血が上部に聚りて胃が冷へて痰を生じ、氣は上りて熱を生ぜし次第である。丁度自ら竈の薪を抜き去りて米が蒸せず。蒸氣が立たぬを苦にすと同様であるから、一切の心配を止め、神や佛に生命を托す可きである。お前は眞宗ださうなから南無阿彌陀佛を十萬遍唱へて見よ。必ず効果顯れ來る。又肺病としても

不治と云ふことは無い。病院から見捨られし病者が、神佛に歸向して平癒せし例は斯々である。又人間の精神ほど強ひ者は無い。其例は云々であるとして、下章精神治療に載る所を以て懇々説き聞けしに彼れは非常に歡喜の念を生じ心持が善くなりしと申し居たるが、三ヶ月の後自ら禮に來たのである。右列擧の通りであるから試験に供せられし動物が感染せしとして、少しも微菌病原の證據にはならぬ。反對論者は如何に之を反撃し得るであらう

次に「同書を見るに菌毒の猛烈なることを諄々と説き立て人をして戰慄せしめてある」これは何と云ふ不心得千萬なことであらう。前にも申す如く心は身體の主であるから、苟も畏怖の念を生ずれば直ちに血行に變化を來す者で、是れ即ち前に言ふ感應である暗示である。是の如き不心得千萬な感染の暗示書を天下に頒布すと云ふは、取りも直さず結核の種時である。夫れも微菌が眞の病原ならば尙ほ恕す可きも全く彼等の妄想であるのに、是の如き不心得千萬を敢てするは如何にも相濟まぬことである。斯く言はゞ内務省は云はん。只微菌の恐る可きことを云うた譯では無い。左の如く云ふて居ると云はるゝであらう。

「恐れるな理解せよ。多くの人の中には此の病の恐る可きことのみ知りて、如何したら治療し得るか」と云ふことを考へ、強い自信を以て養生を專一にする人が少ない。勿論結核は大に恐る可き病氣である。併し一面には此の病氣に就ていろ／＼な知識を正確に會得しなければならぬ。即ち結核と戰つて之に打勝つには、先づ強敵たる結核の性質を仔細に、知らねばならぬ。敵の動靜を探つてから、之を

防ぎ之を滅する計畫をたてるのが肝腎である」と内務省は何も知らぬ病者に向て、是の如き責任を嫁し得る者と思ふ乎。醫師ですら前に「今日の醫藥は遺憾ながら無ひ」と自供して居ながら、素人に向て醫師の出來ない注文を持掛るとは何と云ふ不都合であらう。斯の如くんば、結核は恐れるなど言ふても如何んぞ人民の腦裡より畏怖の念を取り去ることが出來よう。

因に記す昔し流行病などの時は惡魔拂祈禱を爲し、村落總出で御輿など持ち出し騒いだ者である。今日より見れば野蠻のやうであるが、實は深理ありての事である。即ち人々の畏怖の念を去らしむる爲めの企で、其騒の爲め跳り廻り笑ひ興じて人心を一新し、勇猛心を得せしむる爲めであつた。古人の遺り方は萬事今日より意味が深い。

最後に我は微菌が病原で無いと言ふ確證を彼等の醫書中から提出する。「第一」西洋の病理通論に「微菌は血行衰弱して組織の營養及抵抗力減少等の素因なければ繁殖せず」とある。「第二」西洋家田中祐吉君の病理總論に「外國の力大なるも内因にして缺如すれば疾病發せず、又外因の力小なるも内因にして大なれば容易に疾病に罹る」と。

右に由れば西洋家も明に微菌の外に素因あることを認め居る。由來西洋家が素因と原因との區別を立るのが則ち其缺陷の暴露せる證據である。抑も疾病なる者は無病なる健康體に一の變化を與ふる者である。此の變化即ち病原であらねばならぬ。然るを其變化たる血行の衰弱、營養及び抵抗力減少等を病原とせずして、其後に生ぜし微菌を以て病原となす理由は斷じて無い。之を病原と云ふならば水が

腐れて子^{ほうふり}が生ぜしとき、水の腐敗は子^{ほうふり}が原因と云ひ得る乎。又濕地に野^{きのこ}菌の生ぜしとき、地に漏れを持つ原因は野菌であると云ひ得る乎。是の如き悖言は不條理千萬である。然るに其不條理を敢てする所以の者は、前にも述べし如く彼等は意識以外には何等の知識無く、潜在意識なる眞智も、靈智も知らず。相對性の外に陰陽太極無極あるを知らず。從て五行と五臟との無形的關係等、一切知らぬから、彼等の知識は眼か耳か鼻等の外に無く。從て顯微鏡を以て此上無き者と爲し、萬事之に由て、判斷するより外に方術無し。即ち血行衰弱抵抗力減少等の原因を知るを得ぬから、顯微鏡で見出したる細菌を以て、假りに病原と見做したる者である。即ち所謂假説であつて、眞説では斷じて無い。是れ其千治萬療悉く無効なる所以である。疑ふ者は本月二十六日（昭和十一年六月二十六日）陸相が保健衛生省新設要求の理由を見よ。曰結核性胸部疾患は著増し居る。明治二十四五年頃の壯丁は千人につき二人の患者なりしが、今日は二十四人である。又結核發生の防止は全然無力を實證した。チブス、赤痢以下法定傳染病は逐年増加の一途である」と又噫醫弊に曰結核菌の發見はありても治療法は依然たる暗黒面なり」と又曰結核菌の發見は結核の治療と意義を異にす。細菌學者は結核の専門治療家と誤解す可からず」と是れ皆な微菌病原説の架空を證明する者に非らずや、之に反して漢方に於ては其病原を主として腎精の色慾浪費と爲し、之に對して精液を増益する藥を主藥として用ゆるに、大醫葛可久の如き七種の神劑を用ひて殆んど百發百中癒なり。詳は拙著肺病豫防及治療篇を見て知る可し。次に微菌の有毒は疑問に屬す（微菌の有毒無毒）野菌には毒物も稀にはあるが、多くは滋養食物で

ある。又微はカビであつて餅^{もち}などにも生ずる。又各種の麴^{こうじ}は皆微^{かび}であつて、酒、醬油、味噌等を醸す酸酵素である。此の酸酵素が無くては調味劑は出來ぬ所を以て之を觀れば、微菌は毒物とするよりは無毒の有益品ではなからう乎。思ふに微^{かび}は醸造物に就ては諸物質を融和化合せしむる作用品である。其他に納豆、魚酢の類もある。疾患に就ては其疾患を解除する有益物であるまい乎。例へば糖尿病に癰疽を生ずるは其鬱積する熱毒を去る天の配劑であらう。瘡瘍に膿^{うみ}を發するは血行の塞滯を通ずる自然の妙用であらう」次に「コッホ」が説の杜撰なるは「ペスト」病原を以て鼠と爲し、猫を飼養して之を防ぐ可しと云ふ一事を以ても推定するに足る。借問す西洋流醫家は今仍ほ依然として之を信する者ある乎。又魚類の微菌「トラホウム」の微菌説を今仍ほ信する人ある乎。乞ふ夢より醒めよ（虎列刺微菌は支那の上海より來るとて検査せし時代もあつた。然るに上海には虎列刺病は絶無なりし滑稽もあつた）次に試験管も亦微菌病原論と同く無効の者と信す。我は壯年の頃淋病に罹り濁尿を出せし折、兩人の醫師尿の検査を爲し、皆糖尿病と診斷せしかば、縣立病院に行きしに先づ入院せよとのことなり。依て入院したれば毎々尿を試験管にて調べ六十日間を経て何の病たることも分明せず。後には膀胱電燈など用ひて調査せしも依然分らざりしかば、呆れて退院せり。處が糖尿病でもなく、矢張り淋症なりき。余は此れも亦漢方再興の志を起せし原因の一なりき。

第六節 解剖生理學の杜撰

現代西洋醫家及衛生當局或は昔の日本蘭學者は西洋の解剖圖及び之に基く組織學を以て精巧緻密完全

無缺の者と誤認心酔せり。我等は其迷夢を破り其杜撰を證明す可し。

一、先づ注意す可きは外觀の精巧緻密を觀て内容の豊富を卜するの愚を、論ず可し。(1)西洋の油畫と東洋の畫と其内容の豊類如何ん。一齋先生曰東洋人の書畫は精神の寓する所なり。雅致ありて永久の賞也。蘭人の持ち來る物件は雅致無くして一時の賞のみ、其精巧は恐る可し。人をして奢侈に入らしむ」と至言と謂ふ可し。日本の國寶と歐米の精巧品と其優劣如何ん。(2)支那は古典の禮記に於て精巧品の作爲を禁止せり。是れ一齋先生の所謂奢侈を慮りし者ならむ。(3)華の美なる者には實なく巧言令色の人には誠少し。吾人は萬事活眼を以て活斷するを要す。

一、往昔日本の蘭學者は漢醫書の內臟圖と外國の解剖圖と對比して漢圖は想像を以て書き、外國圖は解剖に基く貴重品と誤認せり。現代醫最も然る可し。是れ華の美を見て其内容を閑却する者なり。抑も漢方の內臟圖は漢書と俱に生體の洞視に成れる者にして圖は粗なるも精は書に在りて完全無缺更に加ふ可きなし。之に對する外國圖の緻密は寫真的にして、一毛一糸漏す所無し。而て其漏す所無き所以の者は、天人合一なる陰陽五行の理を知らず。從て經絡が天の三陰三陽と俱く、五臟六腑が五運六氣と俱く、疾病が天變地異と同一理なるを知らざるより、圖を作り組織を書くに當り、要と不要とを識別取捨する能力無かりし結果にして、其寫真的緻密は反對に其無識無學を暴露する者也。譬へば藥學者が山に入て藥草を採るが如き善く其藥と藥に非らざる者とを撰びて採取す。之に反し藥學に迂なる者は之を撰ぶ能力無ければ雜草と共に採集するに同じ、今之を實際に就て言へ

ば解剖圖の何々筋、何々神經、何々動脈、何々靜脈、某細胞、某血管、某淋巴の類は總て雜草にして醫療上無用乃至無用の區別なり。漢醫書に照して其然るを知る可し。若し雜草にあらず、無用にあらずと云ふならば、其効用を一々明示せよ。之を前節の化學藥手術等の不結果より推すも其無用物たること明白なり。故に曰現代の解剖生理學は杜撰なりと。之に反して漢方の內臟圖及び十二經奇經八脉乃至之に基く治療方は生體の洞視に由る完全無缺、疎にして漏さず眞に其要を得たる者也故に之を用れば必ず効果ある也。

今や其生體洞視を立證せん。

(1) 第三章十四經發揮第二序の要に曰「隧穴六百五十七を通考して治を施せば、則ち醫の神秘盡く蓋し古聖人の至靈を以て洞視して定る所なり。故に能く系脉の眞を審にし、虚實の變を原ね名號を立て人をして識得し病を治めしむ。後世に至り數々解剖して幽を索め隱を探りしも其範圍を越ること能はず」と又解剖を疑ふ者は靈樞經、經水篇を見よ曰「死すれば則ち解剖して之を見る」と黄帝以前既に死體の解剖も行はれし確證ある也。日本の蘭學者及び今の醫家之を知らずして、外國の解剖を以て新發明と誤解し心酔せし也。

(2) 十二經脉の流注が肺經に起り順流して肝經に至り肝經より肺經に還り周廻して息まざることを知りしは、生體洞視にあらずれば能はず。

(3) 奇經八脉は諸經血の滿溢に備へたる潜伏せる副道なり」生體洞視にあらずれば知る能はず、其

委細は難經を見よ（現代醫之を知る乎）

- (4) 其奇經八脈と十二經脈の會合する諸穴は第三章十四經序文に記す洞視にあらざれば知る能はず而も其會合は種々複雑にして單一ならず、委敷は本草綱目を見よ（現代醫學之を知る乎）
- (5) 手の三陰は臟より手に走る。手の三陽は手より頭に走る。足の三陽は頭より足に走る。足の三陰は足より腹に走る。生體洞視の證（素問）
- (6) 陰氣は足より上行して頭に至て下行し、臂を循りて指端に至る。陽氣は手より上行して頭に至て下行して足に至る。洞視の證（素問）
- (7) 陽氣は足の五指の表に起る。陰氣は五指の裏に起る（素問）（現代醫以上を知る乎）
- (8) 陽明は五臟六腑の海也。宗筋を潤すことを主る。衝脈は經脈の海也。谿谷を滲灌することを主る。陰陽宗筋の會を總て氣衝に會す。而て陽明之れが長と爲る。帶脈に屬して而て督脈に絡ふ。故に陽明虛すれば則ち宗筋縱みて帶脈引かず。故に足痿て用ひられず（素問）（現代醫之を知る乎）
- (9) 井榮俞原經合は各經脈の流注にして其出る所を井と爲し、其流るゝ所を榮と爲し、其注ぐ所を俞と爲し、其過る所を原と爲し、其行く所を經と爲し、其入る所を合と爲す。其要を知る者は一言にして終る。其要を知らざる者は流散して窮り無し（靈樞經）（現代醫之を知る乎）

- 10 靈樞經曰五臟に疾有れば之を十二原に取る（前項の原穴なり十二原は十二經の原也）十二原は五臟の以て三百六十五節（穴也）の氣味を稟る所也五臟に疾有れば其應（兆候）十二原に出づ、十二原各々出る所有り。明に其經の原を知り其應を視て五臟の害を知る（現代醫之を知る乎）
- 11 難經十二經脈は皆生氣の原に係る此の原は十二經の根本也所謂腎間の動氣也此れ五臟六腑の本也十二經脈の根也。呼吸の門也。三焦の原也。一に守邪の神と名く（現代醫之を知る乎）
- 12 扁鵲は垣を隔て、洞視し、倉公は望視して人の病を知りしことは誰も知る所なり。況んや上古の神聖おや。當今の被催眠者すら函箱中の物を洞視し或は千里眼を有す古の神醫何ぞ之を能し得ざるの理あらんや。
- 以上列擧する所、皆神聖生體洞視の確證也。若し否らすとせば、現代の解剖生理學者、何ぞ其生理學に於て、上文の如き幽玄微妙なる適切の説明を與へざるや。又其治跡を示さるゝ我現代の解剖生理學を觀るに支離滅裂、更に一定の系統連續無く、皆斷片的にして其用途すら説く所なし、何を以て組織と名づくるを得ん、何を以て病原病理を窺ふを得ん、況んや血管の外に神經有りとするは何故ぞ、漢書に於ては經絡即ち血管にして感應を兼ね主る別に神經なる者無し、即ち素問脈要精微論に曰脈は血の府也と靈樞本藏論に曰經脈以て血を行らす」と素問厥論曰營は水穀の精氣也脈に入り上下し、五臟を貫き六腑に絡ふ、衛は水穀の悍氣也。脈に入る能はず。分肉の間を循りて、盲膜を熏し、胸腹に散ず」と是れ血と氣との行路なり。別に神經なる者無し、現代神經痛と稱する者、漢書に於ては脈痺と云ふ、亦以て別

に神經無きを證するに足れり、果して然らば、運動神經、交感神經、末梢神經、撓骨神經、某某皮下神經等全く蛇足也。又衛即ち白血球即ち氣は脉外分肉の間を循る者なれば、別に淋巴腺などの栓索は無用に屬す、細胞の栓議も亦同じ若し假令、神經あり淋巴腺あり細胞ありとするも、衛生及治療上に何の關係も無き者なれば記載するの用なし、然るに其用なき者を記するは、藥と雜草とを撰取する知識無き故なること明なり然らば則ち現代の死體解剖生理學の俱に杜撰にして採るに足らざるを知る可し。我れ此の書を草し終りし後に同志神谷氏昭和九年十月深川晨堂氏編纂の洋漢醫鬪爭史（書名記憶の儘記す）を携へ來りて示さる同書は大部なり。今其要を抄記すれば其鬪爭史なる者は西洋家と淺田宗伯を首領とする漢方家との明治八年漢方禁止に就ての争にして淺田方は學道の同志が溫知社なる者を結び時の政府に漢方解禁の請願を繰り返したる者に係れり、其史に掲げし其百二十頁に今村亮の解剖論を見る。其要に曰余輩某病院に奉職中屢々解剖を實驗せるに體內臟器の位置形狀を知るのみで、内治には何等の益なし我が道は生體の究理で死體解剖は觀ても無益なり。死體の解剖は靈樞經にも見へ、又賔退録には二百五十の腹を割き、又張濟なる者二百七十人解剖し、我朝も寶曆年間三四人の解剖家を輩出せしも、吉益東洞出で張仲景の隨證治を主張せしより無益の解剖を爲す者無きに至れり、解剖が西洋の創開などは捧腹の至りである」と又淺田宗伯塾頭の黒瀬勝山も右の今村亮と同じ云々と記せり、亦以て不肖が雜草混同論の正確なるを證す可し。

第七節 現行改正孔穴の缺陷

大正二年文部省發行の改正鍼灸孔穴は、當今の鍼灸醫開業試験に用ひつゝあり。之に由て鍼灸醫志願者は、唯だ一の寶典として之を學び、各鍼灸學校は之を用ひて教授し、各鍼灸雜誌は之に従て筆を執れり、我執て其孔穴學の書を閱するに、改正孔穴に非らずして改惡孔穴と信するを以て斯道の爲め論駁せざるを得ず。

- (1) 古典十四經の經穴は三百五十四にして總穴は六百五十七也。然るに改正穴は僅かに百二十也。而も其僅かの穴中に八膠中、次膠と中膠の位置顛倒を見るのみならず。主治効能が聖典類經圖翼に相違せるを見る。
- (2) 改正穴は、少陰心經と厥陰心包經には一穴も無く、又奇經八脉中の任脉と督脉には少數の穴を配當しあるも、他の六奇經脉は全く缺如せり。
- (3) 主治を見るに補瀉の法も示さず又他の穴と合せて療する方も記せず刺入の分寸も灸治の壯數も示して無い。
- (4) 主治の病名は多く洋名である。西洋の治療にして有効ならば、兎も角、前來既に證明する如く、一として有効な藥治も手術も無いのに、洋名を掲げて鍼灸固有の病名を記せざるは頗る不當で人をして五里霧中に迷はする者である。抑も學道は先入主となる者であるから、初學には必ず間違なき

正しき道を授く可きは古來の鐵則であるの如きは遺憾の至りである。
 (5) 改正穴の取穴法は解剖語を用ひてある。何の爲めであらう。漢方鍼灸書には夫れ()分り易く取穴法が記してあるのに、之を用ひずして難澁なる解剖語を記せしは何ぞや。夫れも彼等の解剖が正しく且つ有益の者なら兎も角、既に前節に於て證明する通りの杜撰虚妄の者であるのに。
 (6) 改正穴書に穴毎に筋肉、血管、神経等を記し、又開業試験に於ても之を問題とせらるゝ趣き也。是れは前節解剖論に於て指摘せし如く無益の者なり。宜しく取り去らる可し學生の精力及時間を浪費せしむる者也。

(7) 改正穴書には消毒の事が記載せられ、試験の問題ミしても重要な地位を占めて居る由、然るに其消毒す可き微菌は前第五節に於て證明せし如く決して病原に非らざれば是れも取り除かる可し。

(8) 改正穴書には鍼の適應症、不適應症、禁忌症の三種あり。皆其症ミしては病名掲げてあつて孔穴では無い、試験問題も同一なる趣き也。本家本元の漢方鍼灸に於ては病名に由て禁刺したる者は決して無い、場所即ち部位の危険に由ての禁穴二十七あるの外は身體の衰弱等に因て左の禁刺あるのみ○身の羸瘦○煽煽の熱○渾渾の脈○死期を知る時○形氣不足、病氣不足○春三月は左足の陽を刺すこみ勿れ○夏三月は右足の陽を刺すこみ勿れ○秋三月は右足の陰を刺すこみ勿れ○冬三月は右足の陰を刺すこと勿れ○五臓の背俞は灸に可なり鍼に不可なり。抑も諸病は氣血の不調に由て起る。即ち其氣血の偏盛偏衰に由て起るが故に、鍼灸藥の三治俱に其

不平を療して平和に歸せしむる爲め、補瀉を行ふに過ぎず。之を外にしては醫療は全く無し、然らば病名に因て鍼に不適、禁忌ある可き道理更に無し、甚ひ哉改正穴の不法實に言語道斷なり。全く治術と没交渉也。

(9) 改正穴の取穴は漢方の同身骨度法又は同身中指寸を用ひずして醫者の指横經を用ゆ、是の如くなれば小兒の取穴にも大人の指を用ゆ、之を要するに改正孔穴は缺陷甚だ多し、天下民生の爲め一日も速に本法の漢方鍼灸道復に歸せられたし、人誰か過失ならむ能く其道を改むる者は君子なり。若し然らずして其儘に委し去らむか其因果應報は累代に及ぶ可し。因果の理法は第一章に詳説せり、

第五章 醫風の墮落

我は草莽の老隱夫世と交らざれば能く知らざれども、長尾醫師の「噫醫弊」鈴木舊代議士の「醫業國警論」の醫風に關する忠言は、現内閣の庶政革新参考にも後生の警戒にもなる可きを以て、抄記すると左の如し。

○「噫醫弊」に専門分科の害を指摘して曰狹者は必しも深からず。廣者は必しも淺からず。今の専門分科は此の理を解せず。謬見甚し、弊害百出す、彼曰八百屋醫學は十九世紀の殘物也と一朝病者あり。

醫家に到れば即ち曰我は某専門なり。某科は知らず。某家に行く可しと、夫れ醫は一通り各科の知識を備へざる可からず。何となれば疾病は身體の各所より發する者なれば也。専門は其一通りを知りて後ちの事なり。且つ近頃専門家互に氣脈を通して、一人の患者を二三ヶ所に引き廻し、人を翻弄し利を謀りて憚らざるに至ては、其弊極れり（鈴木氏醫業國營論に輪姦的と云へり）編者曰夫れ百病の本は氣にあり。第一章に説けり其次は第二章對守眞の原病式に於て五運六氣に分てり、即ち五臟と十二經脈を以て病因と爲せり、然らば則ち醫たる者は専門の有無に拘はらず五運六氣の由來する所乃至五臟十二經脈の組織及其聯絡を知り、並に其表裏の關係治療一通りは知らざる可からず。然るに今の専門家を知らず故に古人之を目して偏門と稱す」本章「醫學正傳序文」是れ也。曰此の醫學正傳は偏門人を殺すの害を防ぐ爲めに作る」と學者宜しく此の正傳書を讀む可し。然らば則ち専門の弊や甚大たること勿論なり。從て専門を標榜するは殺人を標榜するに均し○同書又曰昨今雨後の筍の如く叢生する博士（博士號）の價は世自ら定論あり。因縁、情實、運動、甚しきは迫害（長崎醫大收略）あり。博士號を網し得し目的は金儲けの看板に過ぎず。本來博士號は學問獎勵の目的なるに今却て右の如し」と編者曰然り今や博士號なり。醫師の免狀は大道華街に向て錦覆せる陷穽を設け爲せるに似たり、當局者の猛省を求む○同書に又曰人一朝病に罹れば直ちに醫に走るは常情なり。現代醫師が足元を見て暴利を貪るは此の時なり。内地二三日間を費す往診に數千金を貪る、強欲非道の醫師を出すことあり。一たび此の甘汁を嘔りし者は、前例と稱して果は自己より進んで請求す、是れ今日醫風墮落

の一因なり」又曰近世科學の發達は偏理觀念を壓し、肉欲主義を爲り、淫風其極に達し某大病院の如き妙齡の看護婦を養成し、一房一人前の病室は、吉原の娼樓に似たり病室の廊下は宛ながら娼家の如く艶語痴話を聞く、職員や看護婦等が待遇の厚薄は一に謝禮の多寡に比例す、患者や附添人は其弊に堪へず。暗涙を呑む者あり、入院患者は病院の輪奐美と院長の肩書に依て集り、其内情の右の如くなるを知らず。某病院の一員吾に語て日本院は田舎富豪患者が金の捨場なりと、爲めに告ぐ目下醫學の程度は都鄙大差無し」（博士も常醫大差無し）と編者曰都鄙の醫術皆前來舉げし微菌假説に過ぎず。都鄙大差無きは素より當然なり。同く是れ阿蒙たるを免れず。無醫の自然癒を以て賢明とす。

○「噫醫弊」の要に曰今の智識萬能醫家は、學問技術の爲めには、良心を犠牲に供して憚らず是れ豈に醫學の本能ならんや」と前後皆意譯也。原文は長く且つ難解也。又曰今の醫學は植物學者が山に入りて珍草を集むるが如し、而て應用の道を知らず死學のみ」ミ然り細菌學何の實効がある。徒に人をして菌毒を恐れしめ、且つ爲めに無用の消毒費と時間とを失はしむ、之を全國に統計せんが莫大の損失也。又曰さるにても世の博士達の鐵面皮なる原因醫學（細菌）の發達せし事を借りて、治療も之に伴ふて發達せし者の如き假聲を作し天下の病者に臨む、焉ぞ知らん其處置は依然たる舊阿蒙を免れず」と誠に然り余毎に鍼灸雜誌に於て之を見る。是等は學生をして五里霧中に迷はしめ、其進路を妨ぐる者にて其罪大なり。

○又曰我等は、醫は自然の僕と思へり、今の醫學者は自然に不忠實なり驚かざるを得ず」と然り鏡檢、

細菌、化學藥等悉く不自然也。其治の無効有害乃至其生活難皆不忠實より來る天罰也。

又曰學校を出で、開業し實地に治療を試る所の新醫家よ、卿等が其始め醫に志す時の希望は、廣大にして醫學は如何に尊き者かと思惟せしならむ、然るに實地之を應用するに至りては、案外其効果の薄弱を悟りしならむ、是れ當然に起る感想なり」と然り良心ある新醫は斷然醫業を抛ちたるもあり。或は患者に對して藥を與へず唯だ水を飲ましむるもある也。謹て後生に告ぐ諷に醫に志すこと勿れ身を誤り人を害し、地獄の報を受け子孫に患を遺す。

又曰世に肺結核必治を標榜して盛に患者を招致する醫者あるも今の醫學に於て結核に向ては對症療法の外何の藥も發見せず」ミ對症療法は原因治療にあらず全く彌繼策にして却て害毒を與ふる場合ある也。

又曰細菌學の發達を口實として治療も進歩せし如く言ひ觸し、無智なる病者を欺き、貪慾飽くを知らず是れ我國醫學の大弊也。

又曰西洋の碩學は學問に身を捧て、名利に淫せず。悠然として居る。現代醫中是の如き者を見ず。大學の教授にして黄金に秋波を寄せ、或は投機を爲し商人と相伍する者あり。故に學風振はず。風紀破る」又曰今の日本には純粹の醫學者殆んど無しと。

又曰吾等の希望は醫の本領たる自然療法の廓大である。是れ以上要求する勇氣はない」ミ是れ西洋流の醫家としては當然の希望で、問然する所は無い、之に由るも現代醫學の無効なるを證して餘ある。

東洋醫は第一章に詳述せし如く、自然療法は中醫に相當し、上醫は自然を左右す。

又曰醫學者たる者は無慾にして世界の人類を救ふて不朽の芳名を後世に残す可し。現代醫の如く惡名を得る迄腐心しても冥途の土産品とはならざる也。

又曰前章に於て一般醫師の常識に乏しき弊を指摘し置けり、此の弊最も甚し」と然り中學程度にも及ばぬ學問を以て、人命を掌るなど云ふことは、到底話しにならぬ滑稽なり。第一章を讀みて古醫の學に比較し、見よ釣鐘と提灯よりも其差甚し、是れ現代醫の有害無益なる明證也。政府は一日も速に其制度を改め、傷殺の害を去らざる可からず。否らざれば政府は毒殺の根本人たるに等し、其罪庸醫に億萬倍す。

又曰今の傳染病學者は、單に傳染の理を研究するに止まる。消極的研究たるを免れず。傳染病が人に由り傳染する者と傳染せざる者との理由は如何ん、學者は其理を究むるを要す、脚氣病原だも十年前より論争中にて一定せず云々」是れ細菌一偏の學を以て知り得可き者にあらず「コレラ」の如き飲食生冷に傷れ、外は風寒暑濕に感じて成る」其症たる風に因る者は風を懼れ、寒に因る者は寒を恐る細菌ならば豈に是の如き異徴を呈せんや。又脚氣の如き風濕、濕熱、寒濕、食積の異種あり。故に各其症候を殊にす、豈に細菌ならんや。現代醫學の無識昏昧なる皆此の類也。

又曰搜索的にして綜合に乏しき今の醫學者よ、宇宙の事物は小極もあり。大極もあるなり。卿等は小極にのみ盲進せり云々」と然り彼等は所謂地を掘て天を求むる者なり。枝葉に走て根本を失ふ者な

り。夫れ宇宙の理たる陰陽太極は古來之を樹木に譬へて曰「一本双幹千枝萬葉」と一本は太極也。双幹は陰陽なり。千枝萬葉は陰陽の千變萬化也。卿等は二本なる太極を知らずして、千枝萬葉の桎索に勞れ何の効果をも擧げ得ずして一生を終りつゝある也。是れ古より學道正邪の撰擇を尊ぶ所以なり。卿等は速に歐米流を捨て、東洋醫道を學ぶ可し。否らざれば何時迄地を掘りても、天は得られざるべしと請合也。

又曰吾は現代醫學の缺陷を披瀝し盡したり、迫害來るも我に於て何かあらむ、要は醫道德に於て純正醫學に於て清健なる未見の知己を得て現代醫風の改善を求むる也」と我其志の日本男兒たるを敬愛す我は即ち其未見の知己也。

又曰吾等は今の程度の醫者にかゝりて死にたい名醫家も治療醫學の缺陷は十二分に認て居る。非醫者の跋扈も民間療法の流行も皇漢醫學の再焔も其缺陷の現象である。

又曰醫は仁術なり。此の事を忘れてはならぬ、金を獲んが爲めに醫となりてはならぬ、忠實なれば自然に富む、學位を得ても、實地の素養なきに博士の肩書で開業し患者を釣るは一種の罪惡で非人間だ。

又曰重大なるは文部大臣の責任である。文部大臣は内閣の更迭に關せず。永く地位を保つ制度を立つ可きである」と最なる説である。併し其人物の拂底を如何せん、夫れよりは内閣の上に古の神祇官を再興し、神記神占を以て祭政一途隨神の舉に出ずるを以て至善至美完全無缺、萬古不易良法と爲す、

著者大國是神政復古論を見て之を詳にす可し。又同志加賀美國光君外數十名は既に神祇官再興の請願書を提出し本號衆議院は滿場一致を以て可決せり。

又曰近來醫學博士の肩書を有する人々が婦人雜誌に墮胎の獎勵と見做す可き者、淫慾誘引の具と見る者がさらにある云々。

これ等は皆醫風の墮落の原因をなすものではなからうか。

329
575

昭和十一年九月五日印刷
昭和十一年九月十日發行

定價金五拾錢

著者 神奈川縣鎌倉郡腰越町津村 岸原鴻太郎

印刷人 愛知縣豊橋市西八町八六 藤田庄太郎

印刷所 愛知縣豊橋市西八町八六 藤田印刷所

發行所 東京市麴町區九段一丁目一八ノ二 岡部素道

醫海の燈臺

岸原鴻太郎著

終